

拓殖大学北海道短期大学保育学科閉科メモリアル事業

「歴史と未来をつむぐ一日」を終えて



発行
拓殖大学
北海道短期大学
新聞局
深川市ムム 4558

祝
入学 卒業



今年、保育学科の閉科を迎えます。その節目として、十月十八日(土)にメモリアル事業「歴史と未来をつむぐ一日」が開催されました。第一部「リカレント教育プログラム」、第二部「ホームカミングデー」思い出とこれからの歩みへ」が開催されました。

第一部「リカレント教育プログラム」第二十九回保育セミナー(本学クリスタルホール)は十三時三十分より行われ、一般参加者五十二名(内、オンライン十名)と保育学科の学生二十六名全員との合計七十八名の参加となりました。

テーマは、『遊び』と『自然』が育む子どもの主体性と豊かな心ーAI共存社会を見据えた幼児期の土台作り』です。文政先生(埼玉県)の及川智博先生による基調講演では、「子どもと大人が共主体であるための『構え』」について学びました。また、森のようちえん全国ネットワーク連盟初代理事長(長野県)・飯綱高原原イチャャーセンター&冒険遊びの森代表の内田幸一先生からは自然の中での保育実践を通して「子どもの主体性を育む環境とは何か?」遊び、自然、AIと共存する社会を生き抜く力」についてお話を伺い

歴史と未来をつむぐ一日
開催日 2023 10/18(土)
会場 深川市ムム 4558
13:30-16:30
17:30-19:30

ました。さらに、たどし認定子ども園(深川市)園長の殿平真先生による「自然の中で育む、かぜっこのインクルーシブ保育」が報告されました。

今年は何年と異なり、卒業生だけではなく、現役生も参加することができ、これらの三名の方に貴重な講義を受けることが出来ました。幼児の発達や保育者の在り方について考える中で、「子どもと共に楽しむことが大切さ」を改めて感じる事ができる貴重な場となりました。セミナーの最後には、本学科の教員であった山田克己先生から、この第二十九回保育セミナーのために作曲してくださった新しい歌「Happy Day」を拓殖大学北海道短期大学保育学科閉科SONOを聴き、会場は温かい雰囲気包まれ、セミナーが終了しました。



第二部「ホームカミングデイ」思い出と、これからの歩みへ」(ラ・カンパニーユホテル深川)が十七時三十分より開催されました。本イベントは、私たち保育学科二年生が中心となり、ステージ企画、デコレーション企画、事務局と進めてきました。当日は、退職された教職員や、卒業生や先輩方、保育学科二年生、本学の教職員など百二十名以上が集い盛大に行われました。テーブルを囲んで久しぶりに再会する先輩方の笑顔や、世代を超えて語り合う姿が印象的でした。ステージでは、保育学科の歴史を振り返るスライドショー、各年代の学生によるリレートークとして、各年代の学生達が自身の思い出や閉科への思いをそれぞれ語られました。企画の紹介として「オンラインタイムカプセル企画」、学生企画として保育学科最後の現役生によるジャグリングや楽器演奏、人形劇の振り返りをおして二年間の活動が紹介されました。プログラムの最後には、敦賀ひろきさんのピアノ、弾き語りの「アメーzing・グレイス」の歌声が会場に響きました。そして、ホームカミングデー



テーブルに装飾するお花を制作する学生たち

(新聞局長) 保育二年 林 楓太

のために敦賀さんが作詞・作曲してくださった「自然に選ろう」を現役学生と教員との思いを力いっぱい込めた合唱によって記念リサイタルが締めくくられました。また、参加者には、保育学科の先生(退職、現役)、卒業生、現役生と共に綴った『メモリアルブック』がプレゼントされました。本学の保育学科の最後の卒業生として、メモリアル事業「歴史と未来をつむぐ一日」の企画・運営に携わり、無事終えることができました。多くの先輩たちや先生方と出合い交流し、保育学科が築いてきた歴史の重みを実感する良い機会となりました。そしてこれからも、このつながりを大事にしなが、それぞれの未来を拓いていきたいと思えます。

一人ひとりの 色が咲いた大学祭

二〇二五年六月二十八・二十九日に実施された今年の大学祭は『桜梅桃李』を自分らしく個性を輝かせる』をテーマに開催しました。大学祭実行委員会は十二月に選挙で選ばれた六名のメンバー（農学ビジネス学科：多胡水葵、小山聖矢、保育学科：鈴木明空、青木柚月、佐藤はるか、飯島洗希）で準備を三月に始めました。大学祭のテーマ『桜梅桃李』を自分らしく個性を輝かせる』には、桜・梅・桃・李。それぞれが違う花を咲かせるように、私たち一人ひとりも違う個性を持っています。私たち学生一人ひとりがある色とりどりの才能や想いがこの学校祭という舞台で花咲くように。そして、みんなが自分らしさを大切にしながら、仲間とともに創り上げる唯一無二の時間になるように、という意味を込めて、『桜梅桃李』を自分らしく個性を輝かせる』というテーマにしました。

準備期間中、各ゼミへの連絡、保健所への申請、パンフレット作成、ステージプログラム企画、会場設営、ごみの処理、学生からのボランティアスタッフの募集、花火やスターの手の配など、これらすべての準備を行わなければならず、様々なトラブルなどあり、実行委員長として大きなイベントを成功させなければというプレッシャーや、責任を感じる場面もありました。しかし、準備は進む中で、学生一人ひとりの大学生活の思い出の一つになるような大学祭を目指し、実行委員会のメンバーと開催に向けて準備をしました。

大学祭一日目は、オープニング、男装女装コンテスト、気配切り、早飲み対決。
 大学祭二日目は、有志発表、早食い対決、拓大〇×クイズ、フリータイム、借り人競争、フィナーレには花火を行いました。

上記のプログラムで実施された当日は、模擬店やステージ企画などに多くの学生が参加し、一人ひとりが笑顔で楽しそうに参加している姿がとても印象的でした。その姿を見て学生にとって楽しい思い出として刻んでもらえたと実感しました。とても嬉しかったです。

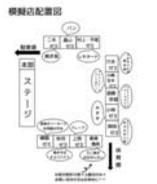


「開会式でお話をする大会
実行委員長・多胡水葵さん」

そして、大学祭を無事成功させることができたのは、協力してくれた学生の皆さんをはじめ教職員の方々、地域の方々、OB、OGの支えがあったからこそです。大学祭テーマ通り、それぞれの個性が輝く大学祭になったと感じます。改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

来年度の大学祭は拓殖大学北海道短期大学にとって最後の大学祭になります。準備や運営はとも大変で、実行委員同士ぶつかり合うこともあるかもしれませんが、大学生活で楽しい思い出になるよう頑張ってください！

(キャンパス特派員：
 大学祭実行委員長
 農学ビジネス学科二年
 多胡 水葵)



ライブパフォーマンス

1日目 6月28日 (SAT)

11:00- オープニング
 12:00- 模擬店コンテスト
 13:00- 借り人競争
 14:00- 早飲み対決

2日目 6月29日 (SUN)

10:00- 有志発表
 11:00- 早食い対決
 12:00- 拓大〇×クイズ
 13:00- フリータイム
 14:00- 借り人競争

20:00- フィナーレ花火



農学ビジネス学科

収穫祭でお腹いっぱいいっぱい

今年も収穫祭(十一月十二日)が開催されました。本学農学ビジネス学科、拓殖大学国際学部が各実習で栽培に関わった農作物を使用し具沢山の豚汁を作りました。主に農学ビジネス学科一年生と国際学部は前日の野菜の下ごしらえ、農学ビジネス学科二年生が当日の配膳などを行いました。豚汁は黒米、焼き芋と一緒にいただきました。全学生、教職員、関係者がお昼時間にはいただきました。みんなで一緒にいただいたお昼はいつもより、より一層美味しく感じました。おかわりする学生も多く、大好評でした。栽培、調理に関わった学生には感謝の言葉をもらった人も多く、とても有意義な時間となりました。

(新聞局員：農学ビジネス学科二年 豊口 みなみ)



「農学ビジネス学科、農場で育てた野菜を豚汁に！」

保育学科実習報告会

学びから見えた目指す保育者像

二〇二五年十一月、保育学科による実習報告会が行われた。夏休み期間に行われた保育所又は施設、幼稚園での実習。発表はパワーポイントを作成し、実習で得た学びや内容をまとめ、それぞれの成果を発表した。実際に使用したスリットシアターの披露、実習先から頂いたプレゼントの紹介などがあり、心温まる内容となった。発表後は、積極的に質問や感想を伝え、改めて共に学びを共有する時間となった。これまでの実習を通して得た気づきや学びは、私たちにとってかけがえのない財産となるであろう。現場で経験した喜びや難しさは、教科書だけでは得られない貴重な学びであった。子ども一人ひとりと丁寧に向き合うことの大切さ、そして、保育者としての責任の重さを改めて実感したのである。仲間と支えあい、意見を交わしながら振り返った時間も大きな収穫であった。また、他の学生の課題を聞くことで、自分自身の課題も見つめ直し、新たな気付きを得る機会となった。実習を振り返り、保育者としての必要な多くの要素を得ることができると有益な経験であった。それぞれの課題と向き合う姿から、より保育者になる自覚が強く感じられた。実習を通して得た学びや今後の課題を糧に、より専門性を高めながら、保育者へと成長していく決意である。この想いを胸に刻み、春からそれぞれの新しい進路へ進んでいく。

(キャンパス特派員：保育学科二年 井ノ口 侑来)



保育所・幼稚園・施設での実習報告会で発表し、質疑応答する学生の姿。

子どもたちの笑顔が輝いた！ 第二十回「子どもまつり」体験記

十二月七日(日)、深川市文化交流ホールみ・らいにて、NPO法人深川市舞台芸術交流協会と深川市教育委員会の主催による「子どもまつり」が開催されました。当日は、乳幼児から就学児まで、約百名の子どもたちと保護者が来場し、会場はにぎやかな声でいっぱいになりました。

会場では「おんがくの広場」「人形劇の広場」「あそびの広場」など、さまざまなコーナーが用意され、幅広い年齢の子どもたちが楽しめる内容でした。

私たちが担当したオーブニングでは拓殖大学北海道短期大学保育学科の小嶋ゼミと幼児音楽教育コースの学生によるハンドベル演奏、手遊びそしてエレクティーン演奏が行われました。ハンドベルでは、全四曲を披露し、会場は優しい雰囲気が行われました。演奏の間にはトークを交え、呼びかけなどの工夫が見られ、会場全体が楽しく明るい雰囲気広がっていました。手遊びでは、クリスマスにちなんだ数合わせを取り入れ、子どもたちも積極的に参加していました。はじめは学生がお手本を見せ、クイズ形式で「一と二のときは何でしょう」と問いかけ、計五問出題していました。その後子どもたちと一緒にもう一度手遊びを行いました。クイズの様子を見ると、積極的に発言し全問正解をして喜ぶ姿も印象的でした。また、エレクティーンでは富樫淳一さんによるクリスマスマスの演奏があり、一気にクリスマスムードが高まりました。私たち演奏者自身も、子どもたちに楽しんでもらうことを大切にしながら、まずは自分たちが楽しむことを心がけ、無事成功に収めることができました。

続いて行われた「人形劇のひろば」では、渡辺貞之さんによるワンワン劇場「ふしぎなかばん」が上演されました。子どもたちは物語の世界に引き込まれて、夢中になっている姿が見受けられました。

「遊びの広場」では子ども交流会コーナー、魚つり、絵本コーナーなど様々なブースが並びました。拓殖短大保育学科と親子劇場プラスの工作体験や「ツリーを飾ろう」、くじびきなどの交流もあり、親子で楽しむ姿が多く見られました。

今回の子どもまつりの活動を通して、子どもたちにとって楽しいクリスマスや思い出になったと思います。そして、私たち学生にとっても、子どもたちと直接関わりながら活動する貴重な学びの機会となりました。

※お写真は保育学科玉木裕先生からご提供いただきました。

(キャンパス特派員：保育二年・木村 豊)



濃い夏の農業研修

今年も農学ビジネス学科二年生が北海道各地の農家さんへ研修に行きました。七月下旬から八月上旬までの二週間で通い、または泊まり込みで研修を行いました。

私は北竜町にある豊竜農場へお世話になりました。主に水稲や麦、イチゴなどをやっている農家さんであり、法人農家として約六十年もの歴史ある農家さんです。北竜町にあるシェアハウスのような施設で寝泊まりをして毎日農家さんへ通うと言った生活でした。豊竜農場ではイチゴの収穫から出荷までや、水稲の薬剤散布のドローンのバッテリー交換などを行いました。水稲農家さんはこの時期あまり作業がないため、スイカ農家さん、メロン農家さん、花農家さん、選果場など様々なところへ研修に行くことができ、今回の研修で様々な人と交流することができました。

農業研修を振り返って、自らが様々な農作業を経験して、改めて、現役の農家さんの忍耐力の凄さを感じました。学内でも、日々の実習で農作業を行ってきましたが、耕地の規模が大学と豊竜農場とではやはり違いました。広大な農地で農作業を行う農家さんの忍耐力を目の当たりにして、この忍耐力は飽き性の私には足りないところであり、身につけていきたいと思いました。

農学ビジネス学科の農業研修に参加した学生は、学内での農業実習と違う環境で研修を行い、農業に従事する様々な人と交流しそれぞれが多くを学びました。これは一人ひとりの学生のこの夏の記憶に濃く残る研修になったことでしょう。



(新聞局員：農学ビジネス学科二年 豊口 みなみ)



第二十二回実験・実習農場公開デー開催!!

七月九日(水)、例年行われている「実験・実習農場公開デー」、今年度も開催することができました。今年度は、実験・実習課題には、有機物を使用した水稲栽培の開発、秋まき小麦の施肥試験、大豆・小豆の試験栽培、サツマイモ・落花生栽培試験、スターチス、トルコギキョウの栽培試験、天然酵母の発酵試験、廃棄されるリンゴの皮等を使用したジャムづくりの研究でした。そして地域・社会に関する取り組み課題には、食料・農業・農村問題の探求、企業・団体による社会貢献、社会調査の手法と分析がありました。

従来は、農学ビジネス学科環境農学コースで実施していましたが、昨年度、コース制が廃止になり、今年度は農業関係のゼミのみならず、地域振興のゼミも参加し、学校内で自身の研究について説明を行いました。

農学ビジネス学科二年生と拓殖大学国際学部農業総合コースの3年生の一部が地域の方々や農業関係者、後輩に日頃の研究や圃場の説明を行いました。私は日本酒製造実習で使われている水田の説明を行いました。様々な方からの質問や意見をいただき、水稲や酒米についてより一層理解を深めることができました。

一年生は先輩方の活動を見て、次年度の卒業研究の参考にするため積極的に参加していました。二年生や三年生は専門の方から鋭い質問をいただいたり、活動の紹介から交流をすることができたり、今後の活動に役立つとても有意義な農場公開デーとなりました。



(新聞局員：農学ビジネス学科二年 豊口 みなみ)



百五十人越えの農産物販売会

ーログハウスプロジェクトー

ログハウスプロジェクトは農産物を販売し、地域の方々と交流しているサークルです。販売会は年四回あり、四月の野菜花苗販売会や十月と十一月の農産物販売会、十二月のクリスマス体験会です。活動人数は正規メンバー五名、そこにボランティアスタッフが募り、その数を含め二十四人で活動しています。農産物は授業で栽培したものを販売しています。

販売会の準備としては、農場の職員前川伊織さんと販売できる野菜などを相談して計画書を作り、POPなどを制作して広報を行っています。

私が一番印象に残っている販売会としては十月の農産物販売会です。販売しているものは、学生が授業で栽培しているもの。主に、時期によりますが、米、黒米、馬鈴薯、サツマイモ、人参、玉ねぎ、ラッカセイ、サツマイモ、はくさい、きゃべつ、花、加工物ではパウンドケーキなどです。これらの生産物の一部には学生が授業で栽培したものが含まれている。

ログハウスプロジェクトの活動も地域の方々にも広まりはじめ、約一五〇人の方々が販売会に来てくださいました。今まで以上に大行列だったのでものすごく驚きました。

来年度を担う後輩には、地域の方々にも販売会を楽しみにしている人がいるのでぜひ継続して欲しいと願っています。

(キャンパス特派員：農学ビジネス学科二年

ログハウスプロジェクトリーダー 岡野 花菜



お米、黒米、マリアーシユカレー
どれもおいしい！



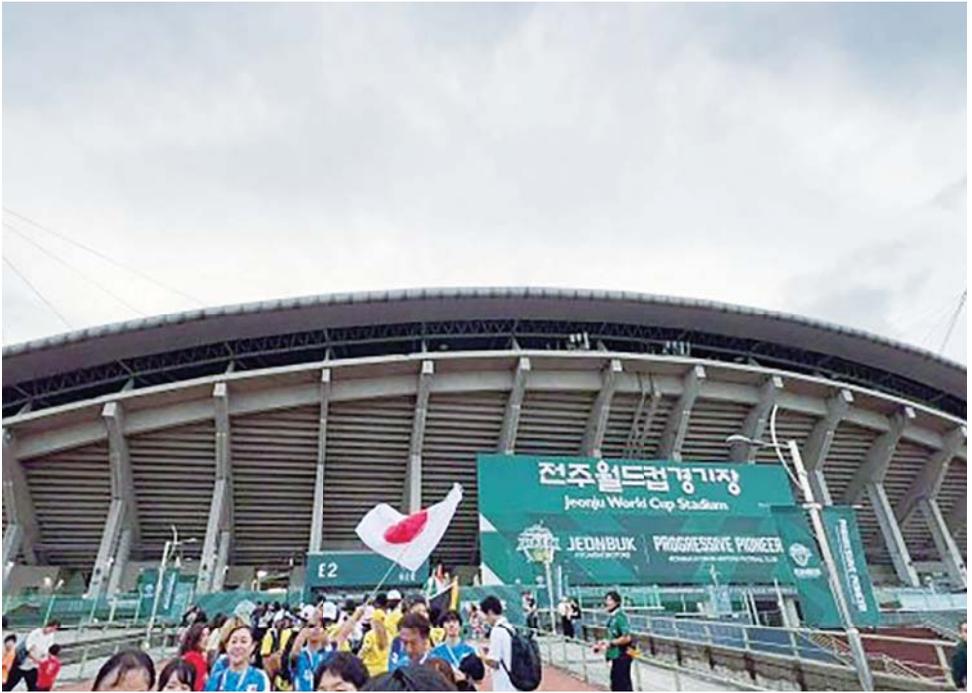
農場で栽培した野菜を販売する学生



【世界への挑戦】

ドローンサッカー部、FIDA World Cup で決勝トーナメント進出!

～韓国・全州で開催された世界大会で
「世界の壁」と「確かな手応え」を実感～



二〇二五年九月二十五日から二十七日にかけて、ドローンサッカー発祥の地である韓国・全州市で開催された「FIDA World Cup Jeonju 2025」。本学ドローンサッカー部の学生六名（農学ビジネス学科）が「クラブチャレンジャー部門（Class 20）」に出場しました。世界三十二カ国から選手が集結したこの大舞台で、彼らは何を感じ、何を持ち帰ったのか。現地での熱戦の模様と、部員たちの生の声をお届けします。

激戦の予選リーグ：

予選リーグでは、強豪国である韓国・インド、トルコのクラブチームと対戦しました。初戦の韓国チーム（Angel Bono など）には大差をつけられ世界のレベルを見せつけられました。続くインド戦では「相手ストライカーのコースを見切り、ブロックする」という作戦が功を奏し勝利。トルコ戦では機体トラブルにより「4対5」という数的不利な状況になり惜敗しましたが、チームは総得点数および得失点差で見事に予選を二位で通過し、ベスト64（決勝トーナメント）進出を果たしました。

世界王者との対決：

高い壁と新たな目標

決勝トーナメントの初戦相手は、奇しくも予選で敗れた韓国チーム、そして昨年の世界王者でした。アタッカーの小山聖矢さんは「予選ではチャンスで決めきれず悔しい思いをした。決勝

では落ち着いてゴールを決めることを意識した」と奮闘。チーム全体で挑みましたが、セットカウント0-2(9-22、10-18)で敗退となりました。しかし、山田康介さんが「勝てなかったが、昨年の世界一位相手に皆奮闘できた」と語るように、世界トップレベルを相手に自分たちの力を出し切った試合となりました。

■ 部員たちが肌で感じた「世界」

■ 圧倒的なスピードと基礎力 佐藤元治さんは、強豪チームとの差について「基礎の動き」を挙げた。「ドローンが弾かれてから復帰するまでや、ゴール後に自陣へ戻るスピードが非常に速い」と、世界の壁の高さを痛感しています。

■ チーム一丸となった戦い 今回が初大会だった加藤将太さんは、試合出場はならなかったものの、応援やアドバイスでチームを支えました。「世界のレベルと技術力を肌で感じ、人生の大きな刺激になった」と語り、サポート役としてチームの決勝進出に貢献しました。

■ 悔しさを超える充実感 初戦から機体トラブルに見舞われた原田惇矢さんですが、決勝トーナメント敗退後は「悔しさよりも、自分たちの力を出し切れた充実感がある」とコメント。他チームの戦略や技術から多くの学びを得たと報告しています。

■ 初の国際試合での緊張と成長 関本真

之亮さんは「日本以外のチームと戦うのは初めてで、緊張した」と振り返りますが、予想以上の技術やスピードに驚きつつも、「自分たちの力は精一杯出した」と胸を張りました。

次なるステージへ

今回の遠征を通じて、部員全員が口にしたのは「もっと強くなりたい」という言葉です。佐藤さんは「大学でドローンサッカーができる限られた時間の中で、理想のプレーができるよう頑張りたい」と語り、小山さんは「北海道での大会に向けて練習を積み、また韓国で開催されるならベンジしたい」と強い意欲を見せました。世界大会という大きな舞台で得た経験と悔しさを、彼らを一回り大きく成長させました。今後のドローンサッカー部の活躍に期待が高まります。

【大会結果概要】

- ・ 出場大会：FIDA World Cup Jeonju 2025(クラブチャンピオンズ部門 Class 20)
- ・ 戦績：
 - 予選：対インド(勝利)、対韓国(敗北)、対トルコ(敗北) ↓ 予選2位通過
 - 決勝トーナメント：対韓国(Ungel Bono/昨年王者) ↓ 敗退(ベスト64)

(キャンパス特派員：
農学ビジネス学科二年・山田 康介
(ドローンサッカー部・部長)



令和7年度拓殖大学紅陵祭 学生交流訪問

拓大と拓大北短大をつなぐ交流の輪 ～令和7年度「北短交流会」アルカディア市ヶ谷で開催～

十一月一日の十八時三十分～二十一時まで、アルカディア市ヶ谷で拓殖大学学生会主催「令和7年度北短交流会」が開催されました。本交流会は、拓殖大学と拓殖大学北海道短期大学の学生・関係者が一堂に会し、日々の活動や大学生活の様子を共有しながら相互理解を深めることを目的として行われました。その模様を取材しました。

当日は、拓殖大学学生会の方が主催のもと、拓殖大学北海道短期大学学生会新聞局、学生広報部「ぶれたく」大学祭実行委員会、自治会、拓殖大学学生会の交流会が行われました。

当日は、拓殖大学学生会本部をはじめ、拓殖大学北海道短期大学文京キャンパスの学生団体代表、拓殖大学北海道短期大学の学生自治会、大学祭実行委員会、学生新聞局、学生広報部「ぶれたく」など、両キャンパスから多くの学生・教職員、卒業生が参加しました。学部や所属を超えた顔ぶれがそろい、世代や立場を超えた交流の場となりました。

当日のプログラムは、校歌斉唱に始まり、主催者挨拶、乾杯、

自己紹介、代表挨拶と続きまし

た。参加者は四つのテーブルに分かれ、約二時間半にわたり交流を深めました。それぞれの大学祭の取り組み、学生広報部「ぶれたく」、新聞局の活動の工夫、自治会活動の課題等が紹介され、様々な意見交換が行われました。

交流の締めくくりには、乱舞「勝ちます踊り」を拓殖大学学生会の方をお手本に教えていただき全員で体験しました。初めて踊る学生も多かったのですが、会場は楽しい雰囲気となりました。

今回の自治会交流会を通して、卒業後にも拓殖大学学生会を通じて、母校と関わり続け、大学祭でも出店を出すなど母校支援に取り組み先輩方の姿を知り、大学とのつながりの広がりを実感しました。また、拓殖大学文京キャンパスでも学生広報部があり、学生自ら大学のニュースを配信していることも知り、学生広報の意義を改めて考える機会となりました。

改めて、今回の交流で後輩につなぐたいことは、私は拓殖大学北海道短期大学大学祭実行委員会総務として活動しましたが、どの組織においても、役割分担

だけではなく、周囲を見て臨機応変に対応していくことが求められると思います。来年の大学祭実行委員になる後輩たちには、常に周りを見て、大学祭実行委員会の内部だけではなく、来場者の方々が何か困っている時には助けることができる存在になってほしいと思います。学生の人数が減り、人手が限られる中でも、一人ひとりが主体的に行動し、来場者や仲間を支えることが、来場者や仲間の活力につながるのではないかと。今回の交流を通して改めてそのように感じました。来年度の最後の大学祭を、後輩たち皆で一丸となり頑張ってください。



【参加者一覧】

【拓殖大学北海道短期大学】
伊欲優弥（学生会自治会長・農学ビジネス学科）、佐藤はるか（鈴木清明）（大学祭実行委員会・保育学科）、岩井大虎、清水希希（次年度候補補・農学ビジネス学科）、小林孝夫（学生・地域国際交流委員長・農学ビジネス学科教授、井ノ口侖来、飯島洗希、鈴木竜聖（学生新聞局・キャンパス特派員）、岡部元太（学生新聞局・キャンパス特派員）、上口紗穂、青木柚月（学生広報部）「ぶれたく」・保育学科）、山田康介、岡田大地、渡部悠斗（学生広報部）「ぶれたく」、農学ビジネス学科 秋月茜（学生広報部）「ぶれたく」顧問・保育学科 准教授、前川伊織（職員）

【拓殖大学文京キャンパス】

森下蓮（総務局連合会委員長・法律政治学科）、岩田悠司（文化局連合会委員長・経済学科）、森樹香（体育局連合会総務部長・国際学科）、石原良祐（大学祭実行委員会委員長・デザイン学科）、田中大聡（学生健康保健委員会委員・法律政治学科）、坂元優飛（新聞部会長・経済学科）、草間大介（八王子学生支援室・学生主事補）

【拓殖大学学生会本部】

松井信彦（総務委員長・学78）、岸波康裕（常任幹事・学78）、大村康二（常任幹事・学79）、高橋宏明（常任幹事・学84）、山田作人（事務局長・学76）、尾花広子（事務局・学79）、鈴木正隆（事務局・学107）、石川久子（事務局、橋本知子（主事・85期）

（キャンパス特派員）

拓大紅陵祭参加：
保育学科二年 飯島 洗希

拓殖大学文京キャンパス 「紅陵祭」を訪問!

二〇二五年十一月一日(土)から十一月三日(月・祝)の三日間、拓殖大学文京キャンパスにて学園祭「紅陵祭」が開催されました。拓殖大学北海道短期大学からは学生自治会、学生広報部「ぶらた」^{ぶらた}、学生新聞局が訪問しました。

今回の交流は、互いの学生の活動や、大学について広く知ってもらうことを目的として行われました。大学祭実行委員会で実行委員長を務めた工学部デザイン学科四年の石原良祐さんに農学ビジネス学科一年の渡部悠斗さんが取材しました。

石田さんは、「今まで定まりきっていなかった運営方針をしつかり整え、組織を立て直し、より良い形で次の世代に引き継ぎたい。運営者・出店者・来場者のすべての人が気持ちよく過ごせる大学祭にしたい。」と、紅陵祭に対する強い想いを語ってくださいました。

今年の紅陵祭のテーマは「色が舞い、音が走り、熱が爆ぜる」。学生による模擬店販売やステージイベント、音楽ライブなど、活気に満ちた企画が数多く行われていました。

一日目は、「紅陵祭お笑いライブ2025」が開催され、M1グループに出演したダイタク、エパース、家族チャールハンの三組

が出演しました。会場は笑いに包まれ、大いに盛り上がりました。

二日目は、和太鼓我道武蔵による特別公演を鑑賞しました。力強い演奏と掛け声が会場に響き渡り、熱気に包まれました。また、拓殖大学の二〇一七年卒業生であるマジシャンGOさんによるマジックショーも行われました。机を無重力で浮かせたり、財布から火を出したりと、目を疑うようなマジックが次々と披露されました。その迫力に圧倒されました。

さらに、劇団紙飛行機による演劇「正義」を鑑賞しました。学生が作り上げた作品であり、一人ひとりの高い演技力に心を打たれました。鑑賞後には、キャストの方と交流する機会もあり、拓殖大学北海道短期大学の拡大ミュージカルについてや、お芝居について互いに意見を交わし、貴重な時間となりました。

紅陵祭三日間を通して行われた模擬店販売では、学生が調理したハンバーガーや豚汁、スカッシュなどが販売され、拓殖大学北海道短期大学で収穫されたかぼちゃも並んでいました。学生の皆さんはとても明るく親切に対応してくださり、楽しい時間を過ごすことができました。

拓殖大学北海道短期大学が二〇二六年度末に閉学を迎える

にあたり、拓殖大学の学生や先生方と交流を深め、大学の魅力や活動について共有できたことは大きな収穫でした。互いに知り合うことで大学ごとの特色や取り組みの違いを知り、学びの幅が広がる交流となりました。今回の訪問をきっかけに、今後も拓殖大学北海道短期大学の魅力を広報やSNSを通して発信し、地域の方々にも興味を持っていただけるよう努めていきたいと思えます。これからの拓殖大学の活躍にぜひご注目ください。



【拓殖大学北海道短期大学・参加者】

伊欲優弥(農学ビジネス学科二年)、岩井大虎(農学ビジネス学科一年)、清水幸希(農学ビジネス学科一年)、佐藤はるか(保育学科二年)、鈴木空明(保育学科二年)、岡部元太(農学ビジネス学科二年)、山田康介(農学ビジネス学科一年)、渡辺悠斗(農学ビジネス学科一年)、上口沙穂(保育学科二年)、青木柚月(保育学科二年)、井ノ口侑来(保育学科二年)、飯島洗希(保育学科二年)、鈴木竜聖(保育学科二年)、小林孝夫、農学ビジネス学科 教授、秋月西(保育学科 准教授)

(キャンパス特派員) 拓大紅陵祭参加: 保育学科二年 井ノ口 侑来

演劇「正義」が問いかける “本当の正義” とは

十一月二日、拓殖大学文京キャンパス（旧館502号室）にて、劇団紙飛行機の演劇「正義」を観覧しました。当日は、岡部元太、山田康介（農学ビジネス学科二年）、岡田大地、渡部悠人（農学ビジネス学科一年）、上口沙穂、青木柚月、飯島洗希、鈴木竜聖、井ノ口侑来（保育学科）、秋月茜（教員）の十人で観劇しました。



劇団紙飛行機は、キャスト八名、スタッフ二十四名で構成されています。キャストは、内田涼さん、鈴木太陽（四年）、郎勝輝、高橋菜加（二年）、岡田船介、郭悠澄、山口莉奈、武田優紀（二年）です。

スタッフ二十四人で、演出は吉崎万莉（四年）、酒井優理子（四年）、長谷風志（四年）、茶畑龍玖（二年）が努めました。舞台監督は宮崎裕太（三年）、五十畑佑美（二年）、高橋菜加（二年）、岡田航介（二年）、酒井優理子（四年）です。音響は、五十畑佑美（二年）宮崎裕太（三年）内田涼（四年）で担当しました。照明は、茶畑龍玖（二年）水島千都（四年）佐藤日和梨（四年）水島千都（四年）佐藤日和梨（四年）である。宣伝美術は、長谷風志（四年）服部菜々花（二年）郎勝輝（二年）吉崎万莉（四年）である。衣装メイクは、水島千都（四年）が担当しました。大道具小道具は、服部菜々花（二年）武田優紀（一年）佐藤日和梨（四年）酒井優理子（四年）が担当しました。

劇団紙飛行機の学生は学年は多岐にわたっており、本公演「正義」の練習期間一か月から二か月でした。当日演劇「正義」のキャッチフレーズは、「異世界侵略集団、ルミナス・レイヤー。人類を守るため、ヒーロー高岩弦（たかいわ ひろし）は「最後」

の戦いに臨む！ 守るべきもののため戦え！」です。あらすじは、悪の組織ルミナス・レイヤーのボスアルテメス・トランジスタ対正義のヒーロー高岩弦との戦いの中でアルテメス・トランジスタの息子サラト・トランジスタが父アルテメスの最期を目の当たりにし、父の仇である高岩弦に復讐を誓う物語です。特訓で得た仲間とのつながりや、家族愛が描かれ、それぞれの正義がある中で、「本当の正義とは何なのか？」を問いかける作品です。

「正義」を観て、キャストやスタッフ全体でしっかりと連携が取れており、舞台づくりにより一体感が感じられる演劇だった。約一か月と二か月という限られた練習期間の中で、声量や表現力に迫力があり、正義について考えさせられる考え深い舞台になっていたと思います。また、キャストの一年生が自ら物語を作り上げていたことにも驚きと感動を覚えました。

私は、昨年の第四十一回拓大ミュージカル「捨てられた夢の箱から」でキャストの丈三を演じた経験があります。その立場からこの演劇を見るとき、練習期間が短い中でもキャストの演技や場面の転換時のかけ方が非常にスムーズで素晴らしい、戦闘シーンの様子もリアリティと迫力が

あり、すごかったです！ 舞台も照明のタイミングや音響のバランスも良く、完成度の高い舞台であったと感じました。

この演劇で感じられたことは、「正義」の形は決して一つだけではないことです。ヒーロー高岩弦は人類を守るために戦っていました。サラトは父親を奪った高岩弦を憎む相手でした。同じ出来事でも立場が違えば見え方は大きく変わります。物事を一方的に判断せずに、相手の立場になって物事を考えることの大切さを学ぶことができました。演劇「正義」をみて、人として「正義」とは何かを自分自身に問い続けながら、これからも成長していきたいと思いました。

（キャンパス特派員）
拓大紅陵祭参加：
保育学科二年 鈴木 竜聖



演劇「正義」のチラシ

走りに懸ける “本気”

―紅陵祭で見た拓殖大学自動車部

十一月二日(日)、拓殖大学文京キャンパスで開催された紅陵祭で、普段は八王子国際キャンパスを拠点に活動する「自動車部」取材しました。プーアスには、部員たちの熱意とクルマへの深い愛情が感じられ、単なる趣味の集まりではない「本気」の空気が漂っていました。

自動車部の活動の中心は「ジムカーナ」という競技です。ジムカーナとは、広場にパイロンを配置したコースを一台ずつ走り、ブレーキングやターン、スラロームなどの操作技術を競うタイムアタック形式の競技で、スピードだけでなく、正確さと車両コントロール



が問われる、底知れぬ奥深い魅力があります。部員たちは関東大会や全国大会、新人戦などに積極的に出場し、今年度は全関東新人戦で準優勝、さらに全関東大会では個人優勝という快挙を達成しました。遊び半分ではなく、「勝ちに行く」姿勢が、結果に表れています。

活動拠点の八王子国際キャンパスには専用ガレージがあり、クラッシュ交換などの整備も自分たちで行っているそうです。こうした作業を通じて、車の構造やメンテナンス技術を学べるのも大きな魅力です。

さらに、栃木県の「ドライビングパレット那須」や千葉県の「浅間台スポーツランド」で練習を重ねるなど、非日常感あふれる体験が待っています。大会に向けた練習はもともと、仲間と過ごす時間もかけがえのないものです。初心者でも先輩が丁寧に指導してくれるため、安心して始められる環境が整っているのも特徴です。

取材中、国際学部三年生の岩淵正高さんはこう語ってくれました。
「味のある古いクルマや、軽くて運転していて心躍るクルマが好きなんです。理想の車に乗った瞬間、もっと好きになりました」

岩淵さんは週末、自身のトヨタ・スターレット (BR33) で仲間と海や紅葉を楽しむドライブに出かけたり、首都

高速大黒パーキングエリアでクルマ談義をしたりと、仲間と過ごす時間を心から楽しんでいきます。季節の移り変わりを感じながら走る道、エンジン音に耳を傾ける瞬間。それは、日常では味わえない特別なひとときです。クルマを通じて広がる人間関係や経験は、学生生活に彩りを添えるものとなりました。

今回の取材で感じたのは、彼らの「本気」と「楽しむ心」が共存する姿でした。自動車部は、車好きにとって技術を磨きながら仲間と非日常を共有できる、唯一無二の場所です。大会での勝利を目指す緊張感と、仲間と語り合う穏やかな時間。その両方があるからこそ、部員たちは今日もハンドルを握り続けています。

「車が好き」という気持ちをきっかけに、整備技術や運転スキルを身につけ、仲間と切磋琢磨する―そんな経験は、社会に出てからもきっと大きな財産になるはずです。そして、自動車部は、単なるサークルではなく、学生たちにとって挑戦と成長の場になっているのではないかと、今回の取材を通して強く感じました。実際に、部員たちの活動や言葉に触れ、その真剣な眼差しと支え合う姿勢に胸を打たれました。本気で取り組む時間の尊さを、改めて考えさせられた気がしました。

(キャンパス特派員) 拓大紅陵祭参加：農学ビジネス学科二年 渡部 悠斗



「拓殖大学北海道短期大学自動車部の活動の一コマ」

学生目線で大学生活を発信

国際学部広報部との交流

十一月一日、拓殖大学八王子キャンパスにて、国際学部広報部との交流が行われた。

参加したのは、保育二年の青木柚月さん、井ノ口侑来さん、農学ビジネス学科一年岡田大地である。

本交流会は、国際学部広報部と学生広報部「ぶれたく」が、それぞれの活動内容を共有し、学生目線での大学生活の発信方法を学び合い、今後の広報活動に生かすことを目的として行われた。

国際学部広報部は、発足から約一年が経つ学生主体の自主活動団体である。学生目線で大学生活の情報を発信している点が大きな特長である。「大学とはどのような場所か」、「時間割はどのように組むのか」といった入学前の疑問を抱いた経験をきっかけに、学生自らが情報発信を始めた。現在は、国際学部の先輩、OB、OGの助言を受け、国際学部二年生細井さん・国際学部三年生村松さんを中心にSNSでの情報発信などの活動を行っている。

交流では、実際のInstagram投稿内容や企画の立て方について紹介があった。月一回のミーティングで企画を決定し、週一回の投稿を目標に活動しているという。サムネイルを統一するなど見やすさを意識し、ブログ形式の投稿など学生ならではの視点を生かした

発信が印象的だった。受験生や在學生が大学生活を具体的にイメージできる点が魅力である。

今回、学生新聞局のキャンパス特派員として参加し、国際学部広報部と学生広報部「ぶれたく」の交流を通して、学生自身の経験を発信することが、入学前の不安を和らげる大きな役割を果たしていると感じた。来年度のお互い広報部でも学生に寄り添った身近な発信を数多く行つてほしいと願う。

(キャンパス特派員)

拓大紅陵祭参加：

農学ビジネス学科二年 岡部 元太



拓大・後藤新平・新渡戸稻造記念講堂にて



「拓大国際部広報部と拓大北短「ぶれたく」との意見交換会」

新聞局主催 スタディーツアー！

～「学びの多様性」と「震災からの農業再生」を追う～

人から聞く重い想い — 学生新聞局が挑んだ初の スタディーツアー —

2026年2月2日から5日の4日間、学生新聞局として初めての新聞局スタディーツアーを実施した。札幌、大阪、福島の各地を本学学生11名、教員2名の計13名で訪問した。テーマは『学びの多様性』と『震災からの農業再生』を追うである。実践的なジャーナリズムスキルの向上を軸にツアーが企画されたものである。この4日間は、現場で人の話を直接聞き、資料や風景を自分の目で確かめることによってこそ、その意味や言葉の重みや背景にある想いを感じ取り、深く理解できるものだ。そのことを強く実感した4日間であった。

1日目は北海道新聞社札幌本社から始まる。2日目はNPO法人IKUNO・多文化ふらっと、泉佐野市立佐野中学校夜間学級。3日目は東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、双葉町・浪江町でフィールドワークを実施し5カ所を巡る。4日目は震災復興・農業再生をテーマに、対話と取材を行った。

今回の主な目的は、新聞を作成するにあたって、何を大切にするべきか、また読者にとって読みやすい紙面とは何かを学ぶこと、多文化共生の意義とは、どういった人たちがこの社会で暮らしているのかを知ること、そして、震災当時の状況、震災復興の現在の姿を理解することであった。その他にも取材やフィールドワークを通して、参加者それぞれが新たな目的を発見し、当初の目的を超えた新たな課題や視点も見えてきた。

保育学科、農業ビジネス学科の学生が参加し、それぞれの専門性や視点を生かした記事に仕上がっている。是非とも全ての記事を一読してもらいたい。重ねて、本特集は、10名の学生、2名の教員がそれぞれ執筆したものである。記事を読みながら、その学生記者がどのような学びを得たか、どのような人物か、どのような思いで現場に立ったのかを想像しながら読むこともまた学生新聞の楽しみだと感じる。では、スタディーツアー参加者の学びの記事をご覧ください。



スタディーツアー中、林新聞局長

北海道新聞社訪問

北海道新聞社本社取材で学んだこと

「正確さと責任が支える新聞づくりの現場」

二〇二六年二月二日(月)に北海道新聞本社(札幌)に取材へ行き、新聞記者や編集に関わる方からのお話を伺い、新聞作りの大変さを実感した。正確さを守るための入念な確認、締切に追われる緊張感、記者同士の連携がある。その一つ一つの取り組みが新聞への信頼につながっていると分かった。私たちが普段何気なく読んでいる記事も、多くの努力の上で成り立っている。

取材では、実際の作業を見るのではなく、小坂真希記者の方から直接話を聞いた。特に強調されていたのは、事実関係の確認の大切さだ。数字や日時、名前などは必ず正確にメモし、少しでもあいまいな点があれば、その場で確認するという。また、メモを取る段階から事実と自分の考えを分けて書くことで、記事を書くときに混ざらないよう工夫しているようだ。記事を書く際は、「いつ・どこで・誰が・何を・なぜ・どのように」を意識し、読み手が誤解しない表現を選ぶことも重要だと学んだ。新聞は「感想」ではなく、「正確な情報」を伝えるものだからこそ、強い責任が伴う。

今回の取材で学んだことを生かし、拓殖大学北海道短期大学学生新聞でも、読む人の立場を考え、事実を大切に記事を書いていきたい。皆さんは、新聞を読む時、「情報の正確さ」を意識したことがありますか。そのような視点で新聞を読んでみませんか。

(キャンパス特派員/スタディツアー参加: 保育学科二年 鈴木 明空)



横山記者より見出しのつけ方を
レクチャー



小坂記者から取材での心がけを
レクチャー



北海道新聞社本社前= 2月2日(札幌)

北海道新聞社訪問

紙とデジタルの良さについて

北海道新聞を訪問して

今回、北海道新聞本社（札幌）を訪問して、紙媒体とデジタルのそれぞれの役割や強みについて学ぶ機会を得た。取材を通して強く感じたのは、「どちらか一方でよい」というものではなく、それぞれに確かな価値があるということである。また、私は卒業後、保育者になるのだが、保育者として今後社会に出る私たちにとつても利点はそれぞれ沢山存在する。

デジタルの大きな特長は、すぐに情報を伝達することができる点である。閲覧数、年齢層などのデータも把握でき、多様な情報に触れることができる。一方で、正しい情報かどうか、わからないものも含め、良くも悪くもすべての情報が広がるという側面もある。また、自分の興味のあるコンテンツだけを閲覧することができ、さらに、AIが興味のあるようなコンテンツを関連付けて私たちに伝えてくれる利便性もある。

これに対して、紙媒体の新聞には、災害時など電波が通じない状況でも、情報を収集することができる強みをもつ。報道デジタル編集長大矢太作さんにお話を伺うと、北海道新聞では紙とデジタルで扱う内容は基本的に同じであるが、発信する時間帯が違うようだ。スピードに優れるデジタルと紙面を



見出し、記事の作り方を改めて見直す
キャンパス特派員



北海道新聞社（道新デジタル）
大矢編集局長へ取材

北海道新聞

拓殖道短大生 道新へ
新聞記者の仕事学ぶ
1、2年生11人が本社見学

10日午後、北海道新聞社（札幌）で、拓殖大学北海道短期大学（道新）の1、2年生11人が、新聞記者の仕事について学び、本社見学を行った。

当日は、北海道新聞社編集局長の大矢太作さん（左）から、新聞記者の仕事について話を聞いた。大矢さんは、新聞記者の仕事は、社会の動きを伝えるだけでなく、読者の役に立つ記事を書くことが大切だと話した。

また、大矢さんは、新聞記者の仕事は、大変だが、やりがいがある仕事だと話した。大矢さんは、新聞記者の仕事は、社会の動きを伝えるだけでなく、読者の役に立つ記事を書くことが大切だと話した。

拓殖大学北海道短期大学（道新）の1、2年生11人が、北海道新聞社（札幌）で、新聞記者の仕事について学び、本社見学を行った。

当日は、北海道新聞社編集局長の大矢太作さん（左）から、新聞記者の仕事について話を聞いた。大矢さんは、新聞記者の仕事は、社会の動きを伝えるだけでなく、読者の役に立つ記事を書くことが大切だと話した。

また、大矢さんは、新聞記者の仕事は、大変だが、やりがいがある仕事だと話した。大矢さんは、新聞記者の仕事は、社会の動きを伝えるだけでなく、読者の役に立つ記事を書くことが大切だと話した。

拓殖大学北海道短期大学（道新）の1、2年生11人が、北海道新聞社（札幌）で、新聞記者の仕事について学び、本社見学を行った。

当日は、北海道新聞社編集局長の大矢太作さん（左）から、新聞記者の仕事について話を聞いた。大矢さんは、新聞記者の仕事は、社会の動きを伝えるだけでなく、読者の役に立つ記事を書くことが大切だと話した。

また、大矢さんは、新聞記者の仕事は、大変だが、やりがいがある仕事だと話した。大矢さんは、新聞記者の仕事は、社会の動きを伝えるだけでなく、読者の役に立つ記事を書くことが大切だと話した。

北海道新聞の記念新聞

一覽できる紙媒体は、それぞれに異なる役割があり、それぞれの良さがしつかりとあり、片方だけで良いということはないのである。

保育者を目指す私達の視点で考えても、両者の利点は大きい。紙媒体である新聞紙は、保育現場では、子どもたちと一緒に読むと言うことだけでは無く、様々な遊びに応用し発展させることができる。素材としての可能性も広い。デジタルでは、保育に関する最新情報をいち早く知ることができ、今の社会で問題や先進的な取り組みに触れやすい。子どもたちにより良い保育を行うために色々な場所で行われている最先端の技術や新しい知識から、昔ながらの実践まで、保育に関連する情報を幅広く知ることができる点は大きな魅力である。

現在、デジタル版のみを利用し、紙の新聞を読まない家庭が増えている。しかし、災害時など、「もしも」の時を考えると、紙媒体の新聞でないと読めないという問題が生じる可能性がある。そう考えると紙媒体の存在意義は決して小さくない。今回の訪問を通して、情報を受け取る手段の一つに限定するのではなく、それぞれの特性を理解し、活用していくことの大切さを学んだ。

（キャンパス特派員/スタディツアー参加：保育学科二年 飯島 洗希）

NPO 法人 IKUNO・多文化ふらっと訪問

あらゆる子どもたちが生き生きでき、

グローバルな街を目指して

多文化共生を目指す拠点「IKUNO・多文化ふらっと」

二月三日、大阪府大阪市生野区にあるIKUNO・多文化ふらっとを訪れた。ここは、大阪コアタウンに隣接し、廃校を活用した多文化共生のまちづくり拠点である。文化や言葉の違い、ルーツ、家庭状況等に関わらず、様々な子どもたちが自分と社会の可能性を信じ、「生き続けたい」と思える社会を目標にしている。NPO法人と企業の連携を受けて運営しており、子どもたちの「決める権利」の尊重を重視している。

施設内では、外国籍の子どもたちにもむけた学習支援、日本語支援の他、農業や料理等、遠征への研修が行われている。子どもたちが「やりたいこと」と思ったことに挑戦できるように設備や環境が整えられているのが特徴である。

理事の宋悟さんのお話を聞いている時や、建物の中を歩くと、子どもたちの元気な声、楽しそうに走る姿が観られた。更に、多国言語の絵本や漫画が置かれている図書室や今流行りのKPOP等のダンスを体験できるダンス教室等があった。図書館に入ると、木材を活用した三角形の小さなハウスが設けられている。まるで秘密基地のような空間が広がっていた。そこには多言語の絵本や漫画が並び、さまざまな国にルーツをもつ子どもたちが一緒に読書できる環境が整えられている。また、いくつかのパーク内では保育園も運営され、親子が集える場も設けられている。子ども食堂では、小学校から高校生までの幅広い年齢層の子どもたちが集い、ともに食事をする姿も見られる。さらに、農業や調理といった体験活動を通して実践的な学びの機会も提供されていた。

IKUNO・多文化ふらっとはあらゆる文化が生き続けられるグローバルな街づくりを目指し、多国籍の子どもたちを受け入れて子どもたちがやりたいことができる環境をつくっている。私が印象に残った言葉は、『どうせ無理』から『できるかも』へと誰かが自分と社会の可能性を信じていることができ、生き続けたいと思える社会への二つである。

日本に移住し、新しい環境に慣れるまでには多くの時間と努力が必要だ。その過程で居場所を見つけれない子どももいるだろう。しかし、ここでは、子どもたちを受け入れるのではなく、子どもたちが心から居場所と思い、自

分の考えを維持し、他者の考えを尊重できるように活動していると感じた。最初は、あらゆる国の人々が共に理解し合うのは難しいかもしれない。しかし、誰かを理解し合いたいという気持ち強く持ち続けられ、共生し合えることが出来るのではないかと考えた。

私は、この課題は、日本だけではなく世界的な問題ではないかとも考える。困っている人がいれば、ただ他人事のように見過ごすのではなく、私たちが助ける必要があると思う。農業の分野においても、外国人の人々と共に働いていける環境をつくるために、互いに話し合い、理解し合うことを重要視していくべきではないだろうか。

(キャンパス特派員/スタディツアー参加)

農業ビジネス学科一年 岡田 大地



IKUNO・多文化ふらっとの
入り口出の集合写真
= 2月3日大阪市生野区



校内見学：宋悟さんの説明を聞く
拓殖短大生たち
= 2月3日大阪市生野区



図書館にある多言語の絵本
= 2月3日大阪市生野区



屋上のプールを再利用した
バーベキュースペース、
人が集う場所を創造

NPO 法人 IKUNO・多文化ふらっと訪問

境界線を超えて生きる社会へ

— IKUNO・多文化ふらっとを訪れて —

「他国間で境界線はない」大阪市生野区にある多文化共生拠点「特定非営利法人IKUNO多文化ふらっと」を訪れ、宋悟さん（IKUNO・多文化ふらっと理事/NPO法人クロスベイス代表理事）から聞いたこの言葉が強く印象に残った。国籍や文化、言語の違いを越え、ともに生きる社会を実現している現場がそこにあった。今後、日本に暮らす外国人はさらに増加し続けると言われており、二〇五〇年までに一〇〇〇万人規模に増える可能性も指摘されている。多文化共生は一部地域だけの課題ではなく、日本社会全体向き合うべきテーマであると感じた。

IKUNO・多文化ふらっととは、旧学校跡地を活用した「いくのコーライブズパーク」の一角にあり、NPOと企業が連携して運営している。外国にルーツをもつ子どもや若者に向けた学習サポートや日本語教室、進路ガイダンスを実施し、将来の選択肢を広げる支援を行っている。また、体験学習や子ども食堂などを通して地域との交流も生まれ、多世代が関わり合う環境が整えられている。

理事の宋さんの話の中で、特に印象的だったのは、外国籍の子どもが「将来は消防士になりたい」と語ったエピソードである。だが、日本では「公権力の行使」に関わる職業には、法律上就けない場合があるという。この話を聞き、私は「どうして公権力の行使という理由で夢が制約されるのか」と大きな疑問を抱いた。

将来消防士になって「人を助けたい」、「命を助けたい」という純粋な想いが子どもにあっても、国籍が日本国籍でないという理由で制度上でできないというのは、それはおかしいと私は感じた。その子が消防士になり人を助けたい、人の命を救いたいという気持ちがあっても消防士になりたいと夢を抱き、努力をしていることとは別のところで可能性が制約されることに私は強い違和感を覚えた。

言語や制度の壁により、外国人が「やりたい仕事に就けない」現実があると宋さんは語った。私は言葉に大きな驚きを覚えると同時に努力や能力だけでは越えられない社会的な壁があることを実感した。

一方で、日本語教室に通っていた母親が、やがて子ども食堂のボランティアとして活動するなど、支援される側から支援する側へと立場が変わる循環も生まれているという。そこには、人と人とのつながりが新たな力を生み出す

姿勢があった。「困難を抱える人が居場所を得て元気を取り戻し、やがて誰かを支える存在へと変わっていく。その姿を見ることが何よりのやりがい」と宋さんは話した。
境界線を引くのではなく越えていく。その積み重ねが多文化共生社会の基盤になるのだと感じた。今回の取材を通して、私自身も地域の一員として何ができるのかを考え続けたいと思う。

（キャンパス特派員/スタディツアー参加）

農学ビジネス学科一年 岩井 大虎



IKUNO・多文化ふらっとの紹介をしてくださっている宋悟さん
= 2月3日、大阪市生野区

泉佐野市立佐野中学校夜間学級訪問

学びに年齢は関係ない

～泉佐野市立佐野中学校夜間学級を訪問して～

二〇二六年二月三日、大阪府にある泉佐野市立佐野中学校夜間学級を訪問した。竹田隆教頭先生からお話を伺った。

まず、中学校夜間学級（いわゆる、夜間中学）とは、義務教育を受けられなかった人に義務教育を受ける機会を提供できるように設置された学校である。ここには、主に戦後の混乱期に学齢期を迎えたため学校に通えなかった人、外国籍の方で本国で義務教育を修了していない外国籍の人、昼間の中学校で不登校となって中学校を卒業しなかった人、不登校等のためにほとんど中学校に通えないまま、学校の教育的配慮により中学校を卒業した人が通っている。夜間中学校は、令和七年四月時点で四十一都道府県に六十二校設置されている。大阪府は全国で一番多く十一校である。

佐野中学校夜間学級は大阪で一番新しい夜間中学校で、十六カ国から十九名の生徒が通っている。一番多い国籍はネパールの方（二十名）で、日本人は八名の方が在籍している。平日の夜間、午後五時三十分～午後八時四十分までの四時間で一人ひとりの学力に合わせた学習指導が行われている。修業



泉佐野市立佐野中学校夜間学級の校門前で
= 2月3日（泉佐野市立佐野中学校夜間学級）



自己紹介や質問をする学生



竹田教頭先生による夜間中学の講義
= 2月3日（泉佐野市立佐野中学校夜間学級）

年限は三年で、最長六年まで通うことができる。高校に進学することも可能である。

佐野中学校夜間学級が行っている授業内容として、ベーシック一コース：ゼロから初級の日本語を中心に学ぶコース、ベーシック二と一の間のコース：臨機応変コース、ベーシック二コース：初級～中級の日本語を中心に学ぶコース、チャレンジコース：中学生一年生～高校生二年生の内容を中心に学ぶコースの計四つがあり、柔軟なコース分けとなっている。

実際に授業を受ける学生の姿を見学し、まず目に留まったのは、「丁寧で整った文字」だった。学ぶことを大切にしている気持ちが感じられた。さらに、質問に積極的に答えたり、前向きに授業へ参加したりする姿も多く、学習意欲の高さが印象に残った。

夜間中学には、国籍や文化、年齢、宗教の異なる人々が集まっています。本来なら言語や文化の壁があり共に学ぶのは困難かと思われる。しかし、同じ教室で学ぶ中で、互いの違いを理解し合い、共に経験や知識を育むことができるところこそ夜間中学の良さがある。今後、ますます多様性を重視している日本だからこそ、夜間中学のような学びの場が必要だと私は考える。

（キャンパス特班員／スタディツアー参加：保育学科二年 鈴木 竜聖）

泉佐野市立佐野中学校夜間学級訪問

文化を分かち合い心つながる交流会

佐野中学校夜間学級を訪問して

泉佐野市立佐野中学校夜間中学を訪問し、交流会と校内の様子を見学した。夜間中学に通う生徒は、主にネパールや中国、フィリピンなどのさまざまな国の外国人の方々が年齢もバラバラであった。教室や廊下で交わされる挨拶や会話からは、落ち着いた雰囲気の中で学校生活が営まれている様子が伝わってきた。

交流会では、節分にちなんだ活動を中心に行った。まず、恵方巻を私たち生徒の皆さん全員で食べ、その年の方角を向いて黙食を体験した。意味を詳しく説明することはなかったが、静かに同じ方向を向いて食事をするという普段とは異なる時間を共有することで、自然と一体感が生まれていた。その後の豆まきでは、教室に笑顔と笑い声が広がり、場の空気が一気に和らいだ。

続いて行ったよさこいでは、生徒だけでなく私たち自身も踊りに慣れておらず、音楽に合わせて見よう見まねで体を動かした。振り付けがそろわない場面も多かったが、上手に踊ることよりも、一緒に楽しむことが大切にされ、終始和やかな雰囲気が進んだ。

北海道クイズでは、方言やアイヌ文化をテーマに、私たちが考えた選択肢形式の問題を出題した。短時間ではあったが、日本の地域文化に触れる機会となり、交流の一場面として印象に残った。

交流会終了後は、夜間中学生の皆さんが営むカレー屋を訪れ、温かい心遣いでカレーをごちそうしていただいた。活動を通して、人と人とのつながりの大切さを実感する一日となった。この交流会は、学びを通して交流を深め、多文化共生を身近に感じることができ、貴重な場であった。

国籍が違っても、日本で共に生きていくには互いを理解し認め合う姿勢が大切だと感じた。この経験を、今後は自らの学びや将来において、多様な背景をもつ人々一人ひとりを尊重し、相手の立場に立つて考え行動していきたい。また、異なる文化や価値観を受け入れながら、共に支え合える関係づくりに積極的に関わっていききたい。

(キャンパス特派員/スタディツアー参加：保育学科二年 佐藤 はるか)



よさこいの体験 = 2月3日
(泉佐野市立佐野中学校夜間学級)



拓大北短生の自己紹介



北海道の紹介クイズ①



北海道紹介クイズ②



夜間中学生スーさんのお店で
カレーを頂く
= 2月3日 (泉佐野市)



手をつなぎ輪になって
一夜間中学生との交流

東日本大震災・原子力災害伝承館訪問

伝承館から未来へつなぐ声

語り部・島田まゆみさんが語る震災の現実

東日本大震災と原子力災害の経験を未来へ伝えるために建てられた「東日本大震災・原子力災害伝承館」。そこで語り部として話を続ける島田まゆみさんは、震災当時、南相馬市の中心部に住んでいた一人だ。あの日の恐怖や、家族に支えられて乗り越えた日々を語る姿から、災害の記憶を伝えることの大切さが静かに伝わってくる。

展示室に入ると、震災当日の映像や写真が並び、歩くたびに小さな靴音が響く。その空間で語り部として話していたのが、南相馬市の中心部で当時住んでいた島田まゆみさんだ。「あの時は、祈ることしかできませんでした」。落ち着いた声で語られたその一言に、突然の揺れに襲われた瞬間の不安がにじむ。家の中は大きく揺れ、外では何が起こっているのかわからない。原発事故の情報も錯綜し、避難すべきかどうかの判断すら難しかったという。島田さんは「家族がいたから、なんとか乗り越えられた」と振り返る。避難生活の不安や、地域が分断された日々は、どれも一人では抱えきれない重みだった。

農業や保育の現場でも、災害時には人と人のつながりが大きな力になる。地域の支え合いが弱まりつつある今、島田さんの言葉は、私たちが忘れかけている「寄り添う力」を思い出させてくれる。伝承館は、過去を知るだけの場所ではない。語り部の声を通して、災害が今を生きる私たちの課題であることを静かに伝えていた。

震災の記憶は、時間とともに薄れていくものかもしれない。それでも、あの日を語り続ける人がいるからこそ、私たちは立ち止まり、考えることができる。もし同じ状況に立ったとき、自分は誰を守り、誰と支え合えるだろうか。未来の命を守るために、私たちは何を受け取り、どう行動していくのかが問われている。そして今、伝承館を訪れる人々の静かな足音が、記憶をそつと未来へ手渡している。語り継ぐ声は、傷ついた心に寄り添いながら、地域が少しずつ歩みを取り戻す力になっている。

(キャンパス特派員/スタディツアー参加)

農学ビジネス学科二年 伊欲(優弥)



東日本大震災・原子力災害伝承館入口
= 2月4日、福島県双葉郡双葉町



語り部として話を続ける島田まゆみさん = 2月4日



伝承館の展示(震災直後の南相馬)

福島・双葉・浪江フィールドワーク

一度は行くべき浪江町
〜二度と故郷には戻れない思いに寄り添って〜

二〇二六年二月四日私たちは東日本大震災で被災した浪江町を訪れた。東日本震災は二〇一一年三月十一日十四時四十六分に発生したマグニチュード9.0の巨大地震である。地震発生後、大津波が東北地方の太平洋沿岸を襲い、福島県浪江町も甚大な被害を受けた。さらに、地震と津波の影響で東京電力福島第一原子力発電所事故が発生し、浪江町は長期間にわたり避難を余儀なくされた。

バスで被災現場を回る際、被災者であるフィールドパートナーの熊谷優希さんに当時の状況について詳しく説明を受けながら被災した街並みや小学校などを巡った。浪江町は海に面し、稲作が盛んな町であった。海から三〇〇メートルほどの場所にある請戸小学校では、地元住民が集い運動会を開くなど活気があり、賑わっている町であったという。

しかし、地震発生から約五十分後、巨大な津波が町を襲った。津波の被害は甚大で、家は流され、がれきや泥水が畑に入り込んでしまった。私たちが訪れた時には、辺りはすべてが更地になっており、かつての生活や風景を想像するのが難しいほどであった。盛んだった稲作も今では耕作放棄地になってしまっている。そして再び津波が到達する危険性が高いため、現在も一部は災害危険区域に指定され、もう二度とそこで生活することはできない。

被災した請戸小学校では、津波の影響で体育館の床は凹凸が激しく、水道はシンクごと傾いていた。さらに金庫までも壁の隅にまで流されていた。このような被害にあったにもかかわらず、請戸小学校は校内にいた児童や先生たちが誰一人欠けることなく避難することができたという。熊谷さんは次のように話してくださいました。「避難した大平山に到着したのは十五時二十五分ごろですが、学校の時計は十五時三十八分で止まっている。これが何を意味するか分かりますか？それは、あと十五分避難が遅ければ全員津波に巻き込まれていたということです。さらに大平山へ登る道は車で渋滞していたけど一人の男の子が違う道を知っていると他の道に誘導して渋滞を避けることができました」。私はこの話を聞き、ぞっとし、胸が締め付けられる思いがした。それと同時に先生の迅速な対応と一人の男の子の勇氣、何より避難訓練の大切さを改めて感じた。

現在、浪江町ではいくつかの事業が動いている。それは耕作放棄地となつてしまった畑を活用し、太陽光発電を風力発電、水素エネルギー事業など、

再生可能エネルギーの取り組みが進められている。原発事故で被災した地域だからこそ、未来にむけた新たな取り組みとして再生可能エネルギーの活用を最先端に進めている。
二〇一一年三月十一日十四時四十六分から始まった出来事は、今もお終わってはいない。これまでもこれからも忘れてはいけない東日本大震災を、浪江町を。震災を経験していない世代にも、この現実と教訓を伝えたいと心から思った。

(キャンパス特派員/スタディツアー)参加:

農学ビジネス学科二年 岡野 花莖



浪江町 災害危険区域
= 2月4日 (福島県浪江町)



請戸小学校 体育館
= 2月4日 (福島県浪江町)



ソーラーパネル群を見つめる学生



浪江町脱炭素・水素利用事業
(ソーラーパネル群)

株式会社 ReFruits 代表取締役・原口さんの話を聞いて

復興を超えて 産地をつくる

―大熊町で挑むキウイ栽培の未来―

福島県浜通りに位置する大熊町で、キウイ栽培による新たな地域産業の確立を目指す若手経営者がいる。株式会社 ReFruits 取締役社長の原口拓也さんだ。二月五日、福島いこいの村なみえで、農業の視点から震災復興についてお話を伺った。

原口さんがキウイ農家を志したきっかけは、ある一言だったという。「めっちゃうまい！俺も作りたい！」。初めて本当においしいキウイを食べた時の衝撃が、人生の進路を決めた。私はその率直な動機に心を動かされた。復興や地域再生という大きなテーマの出発点が、純粹な感動であったことに、農業の持つ力を感じた。

原口さんは、和歌山大学システム工学科で学ぶ傍ら、在学中に一年間の休学期間を設けて「農業界のジョン万次郎になる」と決意。北海道から沖縄まで全国各地の農業現場で研修を重ねた。和歌山県の梅農家やミカン農家で経験を積む一方、大熊町でもキウイ栽培に関わり、実践を通して技術を磨いてきた。

大熊町は福島第一原子力発電所が立地する町で、二〇一一年の東京電力福島第一原発事故により全町避難を余儀なくされた。それ以前は「フルーツの香る浪漫的里」と呼ばれ、キウイをはじめとする果樹栽培が盛んだった。しかし、震災により農業は一時耕作不能となり、長年築かれてきた果樹産地としての基盤が大きく揺らいだのである。

原口さんは、二〇二三年十月に会社を設立し、同年十二月に認定新規就農者として認定を受けた。現在は三つの畑を開拓している。二〇二二年栽培開始の0.1ヘクタールでは最大1.5トン、二〇二二年開始の0.1ヘクタールでは最大三トンを収穫。さらに二〇二四年には二ヘクタールの大規模園地を整備し、東北最大級となる約六十トン規模の生産を見込む。二〇二六年秋に収穫開始予定だ。

掲げる目標は、大熊町のキウイで年間売上一億円を達成すること。一億円規模に到達すれば、地域を代表する特産として確立できるといふ。原発事故により、目標目前で町を離れざるを得なかった生産者の思いも背負いながら、ゼロから産地を築き直す挑戦が続いている。栽培品種はヘイワード、東京ゴールド、センセーションアップル、ジャンボイエロー、紅紀に加え、香緑、讃緑、香粹、ゴールドおおくまなど多岐にわたる。



株式会社 ReFruits
代表取締役・原口拓也との対話
＝ 2月5日（福島県浪江町）



原口さんから農業後継者の
問題を問われる



原口さんと拓大北短の交流



原口さんのお話のメモを取る姿

「復興」で終わらせない。原口さんが目指すのは、大熊町のキウイで世界を驚かせる産地づくりだ。百年続く果樹産業モデルを構築し、農業によって自立した地域経済を実現する。その言葉には、過去を乗り越え、未来を切り拓こうとする強い意志が込められていた。

（キャンパス特派員／スタディツアー参加）

農学ビジネス学科二年 高木 祐実

株式会社 ReFruits 代表取締役・原口さんの話を聞いて

「復興」「再生」ではなく
世界を驚かすキウイ

震災で一度は途絶えた「大熊町のキウイ」を、再び特産品としてよみがえらせようと呼びかける若き農家がいる。二月五日、私たちは福島県大熊町でキウイ栽培に取り組み株式会社 ReFruits 代表取締役・原口拓也さんにお話を伺った。大熊町は東日本大震災の福島原発事故により大きな影響を受けた町であり、現在も復興の途上にある。そうした地域でなぜキウイ栽培を続けるのか。その背景と現在の思いに迫った。

大阪府出身の原口さんは、大学在学中から果樹による新規就農を志し、全国各地を回って研修を重ねてきた。インターネットプログラムで訪れた大熊町で、かつてキウイを特産品にしようとしていた農家の存在を知り、自らもその挑戦を引き継ぐことを決意したという。二〇二〇年に栽培を開始し、今年（二〇二六年）にはいよいよ収穫を迎える予定だ。

現在の圃場は、震災前にキウイ栽培を手がけていた関本さんの所有地である。圃場だけでなく関本さんの思いも引き継いでいる。関本さんは震災後、次のような言葉を残している。

「長年キウイを指導していて、一つの目標を持った。いつの日か大熊町のキウイの売り上げを一億円にしたい。一年の売上一億に成れば、立派な特産品といえるだろう。目標まであと一歩のところまで、追い出された。二度と帰れない。無念。残念。」

(フルーツガーデン関本「三代目の手記より」)

私はこの言葉を受けて、とても切なくなりました。気候や土壌を見極め、地域に合う作物を見つけ、ようやく目標を掲げこれから頑張ろうとした矢先に、その努力を続けられない環境になってしまおうという。その無念さは計り知れない。本当につらい出来事だと感じただけである。

原口さんは、その思いを受けてキウイを育てている。「やりたいからやる」のではない、受け継いだ目標を形にするためだという。二〇二六年に本格収穫を迎える圃場では、大熊のキウイで年間売上一億円以上を達成することを目標に掲げる。そして「大熊のキウイで世界を驚かせる」というテーマを掲げ原口さんは日々キウイ栽培を行っているのだ。農業は単なる生産活動ではなく、人の思いが積み重なる営みであることを、私たちは改めて実感した。

目標は、口にした瞬間から誰かの未来になる。だから大切なことだと改めて感じた。関本さんが掲げた目標は、今も原口さんの新たな挑戦となり畑で生き続けている。目標は「叶わない」で終わらないのだ。次に夢を受け継ぐのは、私たちかもしれない。一度、自分の目標を声に出してみようだろうか。

(新聞局員／農学ビジネス学科二年 豊口 みなみ)



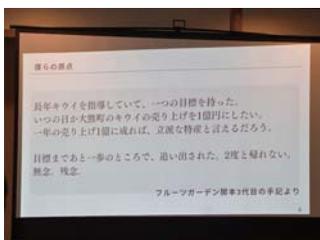
株式会社 ReFruits
代表取締役・原口拓也さんとの対話
= 2月5日 (福島県浪江町)



原口さんの話をきく
= 2月5日 (福島浪江)



農業、将来の目標について語る



原口さんのお話、「ぼくらの原点」

新聞局スタディーツアーの意義

社会のただ中で、学びの火を灯す

今回のスタディーツアーは、二〇二五年七月八日(火)の学生新聞局ミーティングから始まった。その思いでも多くの学生を社会へ送り出し、現場で学ぶ機会をつくりたい。「その思いから学生たちは自ら企画を立ち上げ、「多文化共生」と「農業の復興」を二つの柱に据えた。

二〇二六年一月二十日(火)には事前学習会を開催した。村上先生による「大阪における多文化共生推進の課題」「福島復興の現状と課題(小山論文二〇二二)」の講義を通して、制度の背景や復興政策の現状を学んだ。さらに私から「夜間中学とは何か」「福島の訪問地に関する基礎知識」を報告し、学生たちはグループごとに「現地では何を聞きたいか」を話し合った。まためた質問は、新聞局長が整理して横間が事前に現地へ送付した。単に訪れるのではなく、問いを持って対話に臨むための準備である。

受け入れ依頼の段階では何度も断られた。それでも電話やメールを重ね、大阪、福島、そして北海道新聞社へと学びの場を切り拓いた。参加者募集に奔走する新聞局員の姿に、この時点ですでに本ツアーの学びは始まっていると感じた。一方で、学生主体の企画であるスタディーツアー企画には慎重な意見もあった。しかし、多くの教職員がその趣旨を理解し、様々な調整を重ね支えてくださったからこそ、計画は実現へと至ったのである。本企画は単なる観光ではない。観光が体験を目的とするのに対し、スタディーツアーは明確な学習目標を持ち、社会課題の現場で当事者と対話し、自ら問いを立て、検証し、その成果を記事として社会に発信するところまでを含む教育活動である。大学教育で古くから重視されてきた実地学習の方法であり、今日の高等教育が求めるアクティブラーニングの実践そのものである。それにもかかわらず、このような活動は時に「遊び」と誤解されがちである。だからこそ、私たちはその学修過程と成果を丁寧に伝えていきたい。林楓木新聞局長が「記事を読みながら、その学生記者がどのような学びを得たか、どのような人物か、どのような思いで現場に立ったのかを想像しながら読んでいただきたい。」と記している。この思いが学生新聞局とスタディーツアー参加者の願いである。学生一人一人の問いと葛藤、そして学びの軌跡に目を向けていただければ幸いである。

◆それぞれの現場で

一日目、北海道新聞社(札幌)では、取材と報道の責任について学んだ。鈴木明空さんは「事実と自分の考えを分けて書くこと、情報の正確さを伝える責任があることを学んだ」と記す。飯島洗希さんは「デジタルと紙媒体それぞれの強みを知った」と振り返った。

二日目、NPO法人EUNO・多文化ふらっと(大阪市生野区)では、宋悟理事長の話を通して多文化共生の本質を考えた。岡田大地さんは「どうせ無理」から「できるかも」へという言葉を心を動かされたという。岩井大虎さんは「境界線を引くのではなく越えていく。その積み重ねが多文化共生社会の基盤になるのだ」とまとめた。泉佐野市立佐野中学校夜間学級では、多様な背景を持つ人々が共に学ぶ姿に触れた。鈴木竜聖さんは、「違いを超えて共に学ぶことができる場」であると記している。また佐藤はるかさんは、「多様な背景を持つ人々一人ひとりを尊重し、相手の立場に立って考え行動していきたい」と述べ、自らの将来像と重ね合わせながらその思いを綴っている。

三日目、東日本大震災・原子力災害伝承館(福島県双葉郡双葉町)では語り部の島田まゆみさんの話を聞いた。伊欲優弥さんは「寄り添う力」を思い出させてくれる」と振り返り、岡野花菜さんは「震災を経験していない世代にも伝えたい」と記した。三日目の朝、宿のいこいの村なみえの集会所(福島県浪江町)で開かれた「振り返りミーティング」では、「日本の法制度の問題で、外国籍の子どもの夢を実現できる社会であってほしい。(岩井大虎)」「福島の現状を知らずに生きていることは人としてあり得ないと思った。震災を知らない世代にも私たちが見てきたことを伝えたい。(岡野花菜)といった率直な声があがった。知識として学んだはずの内容が、自らの倫理や責任の問題へと変わった瞬間だった。

四日目、福島県大熊町でキウイを特産品にすることに挑戦する原口さんの話を聞いた高木祐実さんは「復興」で終わらせない。原口さんが目指すのは、大熊町のキウイで世界を驚かせる産地だけでなく「いまも挑戦を続ける場所」として捉え直した姿である。さらに、原口拓也さんとの対話では「農業後継者が少ない中、なぜ農業を継ごうと思ったのですか」という逆質問が投げかけられた。岡野花菜さんは「自分の故郷が好き。おじいちゃん、おばあちゃんを守ってきた土地を、自分も守り続けたい。その思いがずっとある」と力強く答えた。このことは、豊口みなみさんが記した「目標は、口にした瞬間から誰かの未来につながる」と重なる。原口さんとの対話では、震災によっ

新聞局スタディーツアーの意義

て努力の場を失った無念と、それを受け継ぐ挑戦。その姿は学生一人ひとりの胸に刻まれた。将来、北海道で農業後継者を志す拓大北短の学生たちと連絡先を交換し、「これからもつながっていききたい」と語る姿もあった。学びは確実に未来へとつながっている。

◆学びは進行形である

今回のツアーを通して見えてきたのは、多文化共生も農業の復興も、決して過去の問題ではないということだ。外国人労働者の増加、技能実習制度から育成就労制度への移行、日本語教育の課題、担い手不足や高齢化、ALPS処理水放出後の風評問題。ニュースで目にするキーワードは、私たちが訪れた現場と直結している。復興は「完了」ではなく、「進行形」である。多文化共生もまた、問い続けなければならない課題だ。それは遠い地域の出来事ではなく、私たちの日々の選択や関わり方ともつながっている。

他人事として眺めるのではなく、自分事として引き受け、考え、行動すること。問いを持ち続け、対話を重ね、未来へとつながっていくこと。今回の学生新聞局スタディーツアーで学生たちと共に確かめたのは、まさにその姿勢であった。そしてそれは、私自身にとっても大きな意義を持つ学びであった。

いま、拓大北短はその歴史を閉じようとしている。本学教員として学生と共に過ごし、教育と研究の努力を重ねる場が失われる寂しさは消えない。しかし、今回確かめたのは、学びはキャンパスの中だけにあるのではないという事実である。問いを立て、準備し、対話し、発信する。その営みこそが大学教育の本質である。形が変わっても、この学びの火は学生たちの中に確かに灯っている。



スタディーツアーでの様々な準備をする新聞局員



(新聞局顧問 廣関 理恵)

自分たちが何を見てどう感じたのかを語りあう様子

新聞局スタディーツアーには どんな意義があったのか

引率教員の一人として、研修・調査対象と真摯に向き合う学生の姿勢が垣間見られた場面の紹介を交えながら、今回のツアーが学生にとってどんな意義があったかについて述べてみたい。

まず学生新聞局による今回のツアーの目的は、下記四点と思われる。第一に現地を訪ねて現場の「空気を感じ」、当事者から話を聞き交流することで見聞を広めることにあり、これは最重要目的とも言えるべきものである。第二に新聞社での新聞記者、編集者による講話を聴講し、編集部を見学することで新聞局員としてのスキルアップにもつながる機会を得ることである。第三にNPOによる、多様なルーツを持つ子ども達に学校以外での学習機会を保障する活動や地域におけるコミュニティ機能強化を図る活動を知る、震災・農産事故被災地の復興現場において農業新規参入にチャレンジしている若き農業者の活動を知る、こうした専門に関わる対象にふれる体験をすることにある。第四に年齢的にはけつして子どもではなく、また多様なルーツを持つ人々に学習機会を保障するために設置された公立夜間中学校での見学と交流によって、「学ぶことそのもの」の意味を考えることである。いずれもが学生達にとっては学内では得られない貴重な体験であった。

筆者自身の印象に残った学生の姿とあって、二つあげておきたい。一つは三日目の夕食後に行われた、ツアーメンバー間の意見交流会で遭遇した情景である。ある学生は「震災・原発事故災害から復興途上にあるこの地を多くの人々が訪れるべきである」と應ずることなく確信をもって主張し、また記事執筆内容について真剣な議論も行われていた。自身が体験した社会的な問題を他者に伝えようと努力する姿勢に大いに感銘を受けた。二つめは計五か所で講話を受けた際に、さらに質問や感想等を述べるため学生自ら講演者に歩み寄って行ったことである。たとえばは農業者との交流で、実家の営農事情を話題にしたが話がはずんでいる様子に、福島と北海道の農業の未来に希望の光を見る思いがした。

大学生新聞は一般紙のように報道の迅速性を問われるものではなく、学生らしい知的好奇心をもって、社会正義の観点から社会を論じる一種の評論誌的な点特徴の一つであると筆者は考えている。では社会正義とはなにか？それは基本的人権を尊重するということであろう。今回のツアー訪問先は、柔軟な思考を持ちかつ吸収力旺盛な若い学生に対して、このことについ

新聞局スタディーツアーの意義

深く考える契機を与えられる場ともなったのではないかと、「社会の木鐸」と称され「言論表現の自由」の守り手の一つともいえる新聞社。「学習権と発達権」保障の場の維持拡充を目指して活動しているNPOと学校、またそこでは多文化共生の取り組みも同時に行われ、これは「平等権」の追求に該当する。被災者の証言や復興現場を見聞させた震災・原発事故被災地では、生存権・居住権・幸福追求権について考えさせられる（今回の訪問先には採り上げなかったが、侵害されたこれらの権利への補償と現状回復を求めている。住民による「生業（なりわい）」を返せ、地域を返せ！」裁判が続いている。

以上が学生にとってどんな意義があったかに焦点を絞ったツアーの紹介である。学生個々人がツアー先で、どう感じそして何を学んだかは、本紙掲載の記事でぜひ確認してもらいたい。

（キャンパス特派員／スタディーツアー参加者：

農学ビジネス学科教員 村上 良二）

謝 辞

最後に、本スタディーツアーの実施にあたり、ご協力くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

北海道新聞社では、石丸厚子記者、小坂真希記者（みらい教育推進室）、横山清貴記者（編集センター）、大矢太作エディターにご指導を賜った。大阪では、HUNO・多文化ふらっとの宋悟理理事長、泉佐野市立佐野中学校夜間学級教頭竹田隆様にご協力いただいた。

福島では、東日本大震災・原子力災害伝承館の語り部である島田まゆみ様、フィールドパートナー熊谷優希様、株式会社 ReFruits 代表原口拓也様にあたたかく迎えていただいた。また、株式会社 TB 北海道事業部北村由紀様、福島県観光物産交流協会の高橋千恵様にも多大なるご尽力を賜った。

多くの方々のお支えがあったからこそ、参加者たちは社会の現場で直接学び、問いを深めることができた。ここに記して、深くお礼申し上げます。

学生新聞局



1月20日 事前勉強会・まずは課題を立てよう！



オンラインでも打合せしたな～！



伊丹空港から仙台空港へ！



初日は大雪、JR 運休。貸切バスでよかった！



2月3日 節分！夜間中学生と恵方巻を！



帰りの日の飛行機は和気あいあい！！

座談会

「私たちの学びはどこへいくのか
—村上先生を囲んで閉学を前に
語り合ったこと」

本座談会は二〇二五年七月十八日(金) 十時四十分よりラボ室にて開催され、村上良一先生、林楓太(学生新聞局長・保育二年)、豊口みなみ(局員・農学ビジネス二年)、横関理恵先生(顧問)が参加した。事前に、村上良一(二〇二五)「北海道の地域問題① 拓殖大学北海道短期大学(深川市)が地域に果たした役割」および村上良一(二〇二四)「北海道の地域問題② 悪化する北空知の交通、教育環境」急がれる公的支援の強化」(いずれも『NPO法人北海道自治体問題研究所』を購読したうえで臨んだものだ。学生新聞局は、本学閉学を前に大学が地域に果たしてきた役割と私たち自身の「学びの意味」を改めて考える企画を検討していたが、「いま直接、村上先生に話を聞かなければならない」と感じたことが開催のきっかけとなった。当日は穏やかな雰囲気の中にも、閉学を前にした率直で真剣な思いが交わされた。

■閉学後の農業教育の行方

横関「本日はよろしくお願ひします。まず、保育学科は二〇二六年三月で閉

学になりますが、閉学後の農学ビジネス学科の教育はどうなるのでしょうか。」

村上「来年度も農大コースの委託生は受け入れます。ただし深川で学べるのは一年間のみで、二年次からは本別へ移る形になります。これまで二年間だったものが一年間に短縮されます。水稲についても本別で継続する方向ですが、この地域で学ぶ意味はやはり大きかったです。」

豊口「水稲が盛んな地域だからこそ深川で学んできたのだと思います。次の世代が同じように学べるのか、不安はあります。」

村上「北海道農業の基幹作物ですから、水稲コース自体は残るでしょう。ただ、通学や生活の負担は増える。保護者の経済的負担も無視できません。」

■地元高校とのつながりと

#教育を受ける権利

話題が閉学そのものの意味に及ぶと、村上先生は語気を強めた。

横関「本学がなくなるこの影響を、どのように考えていますか。」

村上「これは単に一つの学校がなくなるという話ではありません。地元へ高等教育機関があることで、進学を選択できていた若者がいた。経済的事情や家庭の事情で遠方に出られない学生もいる。その選択肢が失われるということですね。」

そして、村上先生ははっきりとこう述べた。

村上「これ(閉校) はやはり教育を受ける権利を奪っているとなるので、これは厳しく言う憲法違反なんですよ。教育を受ける権利を奪っているのです。」

林「そこまで強い思いを持っていらっしやるとは、正直驚きました。」

村上「もちろん法的に直ちに違憲だと断じるということではありません。しかし、地域から学ぶ場を奪うということになる。私は教育に携わる者として、その重さを強く感じています。」

■農業経済学を学ぶ意味

横関「農業経済学とは、どのような学問なのでしょう。」

村上「技術だけでは農業は成り立ちません。経営が安定し、政策を理解し、消費者に説明できる力が必要です。農業経済学は、農業者が社会の中で主体的に判断するための学問です。」

豊口「最初は『なぜ必修なのか』と思っていました。でも、地域から信頼される農業者になるための基礎だと、今は

わかります。」

林「高校では実習中心で、肥料や政策の話までは深く学びませんでした。大が背景を知ることの意味があると感じました。」

村上「本学は、技術と経済の両面を学ぶ場でした。卒業生がJA幹部や地方議員として活躍しているのも、その成果だと思います。」



左から、豊口局員、村上先生、林局長



座談会ラボ室にて

■地域とともに歩んだ短大の歴史

村上「本学は長く一学科体制で、農業経済を重視してきました。私が赴任した当時は農業経済系の教員が複数いましたが、今は私一人になりました。そしてその基幹科目として農業経済学を置き続けたのは、大学の理念でもありません。」

横関「地域に根ざした短大としての役割を果たしてきたということですね。」村上「全道から学生が集まりました。農業を学ぶ若者の減少や、本州からの入学者減少など環境は厳しくなりましたが、地域に人材を送り出してきた。その歩みは誇ってよいと思います。」

■私たちが受け取ったもの

今回の座談会を通し、私達は「閉学」を単なるニュースではなく、自分たちの地域問題と考えるようになった。村上先生の「教育の権利を奪っている」という言葉は重く、私達がこの場所ですべた意味を強く感じさせるものだった。座談会を通して、「教育を受ける権利」とは何か、「農業経済」を学ぶ意義について改めて向き合うこととなった。ここで手渡されたものは知識だけでなく、地域と共に生きるという「姿勢」そのものではないか。閉学という大きな節目を前に、一人の学生、地域の一員として今何を思うのか。胸に宿した「学びのゆくえ」についての率直な声をお届けしたい。

◆座談会から学ぶ 農業経済の大切さ

私は農業の技術重視で拓殖大学北海道短期大学の農業ビジネス科に入った。しかし、授業では農業経済が必修授業があった。なぜ、技術を学びに来ているのに、歴史や世界情勢などを学ばなければならぬのだろうか疑問に思いながら講義を受けていた。

今回の座談会で拓殖大学北海道短期大学の話が本学の農業関係のカリキュラムの歴史の話題に及ぶと当時の深川市近郊の農業の背景が読み取れ、農業経済中心の話し合いとなった。

村上先生は「だからやっぱりそういう地域で信頼を集められる卒業生を送り出したということは、うちの短期大学、我慢して良いと思いますね。それややっぱりこういう農業で、栽培とかそういう技術のほうと農業経済、両方学んだからこそ地域で信頼を得られる農業者になられたんじゃないかというふうに見えています。」と発言しており、これを聞いて私は地域に根付いた大学だからこそ、地域に信頼してもらええる農業者を作るという意図があったのだと考えた。

拓殖大学北海道短期大学の歴史から、現在の農業経済まで幅広く意見を交わすことができた。

(新聞局長)

農業ビジネス学科二年豊口 みなみ

◆本学の閉校による 地域の影響

私が本インタビューで注目した点は、拓殖大学北海道短期大学が閉校することに対して、地域への影響である。それによって、閉校することでの生じる地域や教育の問題点を再認識すると同時に、その後の懸念点も浮き彫りとなる機会となった。

村上先生は「これ(閉校)はやはり教育を受ける権利を奪っているとなるので、これは厳しく言う憲法違反なんです。これは厳しく言う権利を奪っている」と閉校することに対して強い言葉で考えを示した。続けて、「農業ビジネス、今もそうですけど、全員が農業後継者でもないのに、卒業後一般企業とかJAに進まれる人もいますんですよ。そういう人達も、やっぱり幅広い、この地域は農業が基幹産業だから、農業を中心として幅広の教養を身に付けてね、それぞれの職場で胸張って頑張れる、そういう地域社会の担い手を作るという意味も、農業でなくともね。そういう役割もあったので……(略……)そういう人達(農業職)の教育という場も失われるので。」と本校の懸念点について語った。

文部科学省の「学校基本調査」(二〇二四)からみても四年制大学と比べ、短大の進学率は低い。だが、村上先生の言う通り、少数ながらも短大に「通いたい」と考えている人が一人でも

いるならその権利を奪うということに不満を感じる人は少なくないと考ええる。教育の権利を守ることに、それと同時に都市部への一極集中を避ける必要がある。そして、地方の短大及び大学の閉校は安易に進めるべきでないと感じる。

また、村上先生が語ったように、本学の卒業生は農業、保育問わず地域の職に就くこともある。そういった機会が今後、他大学への入学や転居という形で叶うとなれば、深川という地域の過疎化が促進していくという問題が生じると考える。また、専門知識を学ぶ場が減少すると指摘していた。本学では、農業と保育という人材が不足している分野を学べる場であったが、この場がなくなると将来的に慢性的な人材不足につながるかと考える。

(新聞局長 保育学科二年 林 楓太)



拓殖大学北海道短期大学 校舎(深川)

2025年学生新聞局アンケート

あなたの未来、大学の校舎の未来

～進路とキャンパス活用をアンケートで探る～

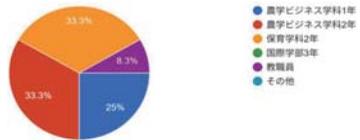
本学は2027年3月に閉学を迎える。学生新聞局では、この節目にあたり、在学生の進路意識と閉校後のキャンパス活用に関する考えを把握するため、2025年11月に「未来を考える—あなたの進路と拓殖大学北海道短期大学閉校後のキャンパス活用に関するアンケート」を実施した。調査対象は、本学に在籍する学生および教職員（農学ビジネス学科1・2年、保育学科2年、国際学部在籍学生、教職員）。閉学という特別な状況の中で、学生や教職員が将来をどのように見定め、どのような支援を求めているのか、また慣れ親しんだキャンパスの今後についてどのような思いを抱いているのかを明らかにすることを目的としている。

0. 属性：あなたの所属学科と学年を選択してください。

【分析】

今回のアンケート参加者は72名であった。その内訳は農学ビジネス学科2年生と保育学科2年生が各33.8%の割合（各24人）を占めている。ついで農学ビジネス学科1年生が23.9%（17人）の割合を占めている。また、教職員が8.5%（6人）を占めている。なお、国際学部3年生は0%（0人）であった。

（豊口 みなみ）

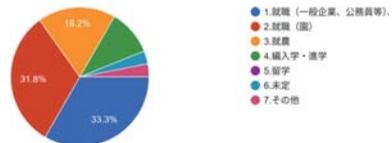


1. 学生：進路に関する質問

【分析】

本問の回答数は66件であった。最も多い割合は「就職（一般企業、公務員等）」で33.3%（23人）であった。ついで「就職（園）」が31.8%（22人）であった。それについて就農が18.2%（13人）であった。編入学・進学が5.6%（4人）であった。未定、その他はわずかにあった。全体として卒業後就職、就農で8割以上を占めていた。「未定」、「その他」については予想であるが、1年生やこれからの人も含まれるのではと考える。

（豊口 みなみ）

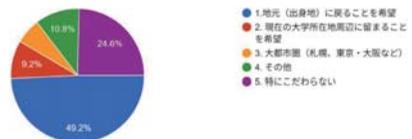


2. 学生：進路に関する質問：卒業後の勤務地・居住地として希望する地域はどこか？

【分析】

本問の回答数は66件である。卒業先の希望の進路先として、「地元（出身地）」に戻る人が約半数49.2%（32人）をしめる結果となっている。次いで「特にこだわらない」24.6%（16人）、「大学周辺に留まる人」9.2%（6人）、「大都市圏に移動したい人」6.2%（4人）、「その他」10.8%（8人）であった。本校学生の多くは深川市以外から来ている学生も多いため、住み慣れた地域に戻る人が多いのは妥当な結果と考える。

（林 楓太）



3. 学生進路に関する質問:進路を考える際に、特に重視したことは何ですか？ (当てはまるものを最大3つまで選択)

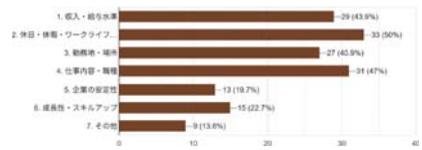
【分析】

進路先に重視するものとして、「休日・休暇・ワークライフバランスについて」50.8% (33人) が一番、次いで「仕事内容」47.7% (31人) という結果になった。「収入・給与水準」43.1% (28人)、「勤務地・場所」41.5% (27人) よりも、休日の日数を重視する人の割合が多いのは、現代においての意識の変化が十分にできていると考えられる。

また、「企業の安定性」18.5% (12人) や「成長性・スキルアップ」21.5% (14人) が比較的低いのも現代的な特徴と考える。

上記の2点も大事なことではあるが、昔と違い、同じ職場先に何十年も勤め続けるという考えが薄れ、自ら環境を変え、転職していく人が現代においては多いという点がこの結果に反映されていると考える。

(林 楓大)



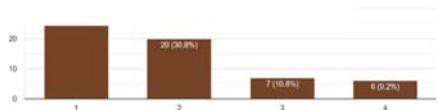
4. 学生の進路に関する質問:卒業後の進路を決定する上で、閉校の事実ほどの程度影響しましたか？

【分析】

本問は65件の回答があった。「卒業後の進路を決定するうえで閉校の事実がまったく影響しない」と回答した人が最多であり、49.2% (32人) について、「あまり影響しないと回答した人」が30.8% (20人)、「少し影響すると回答した人」が10.8% (7人)、「非常に大きく影響したと回答した人」は9.2% (6人) いた。

我々の予想として「影響する」と回答する人はごくわずかだと考えていたが、今回の結果から「少し影響すると回答した人」と「非常に大きく影響したと回答した人」合わせて20%の人が影響すると回答した。詳細としてその多くは1年生が占めているのではないかと予測をする。1年生は進路の方向性がまだ定まっていない学生も多いため、ただ漠然と「影響するのではないかと回答したと考える。詳細の追及が必要だと感じた。

(豊口 みなみ)



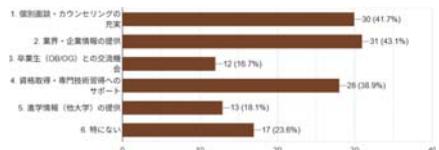
5. 学生:進路に関する質問:進路決定に関して、大学(学科、就職支援室など)に期待するサポートは何ですか？ (当てはまるものを全て選択)

【分析】

本問の回答数は72件であった(複数回答可)。進路決定に関して、「大学に期待するサポートは何ですか」という問いに対して、最も多い回答は「業界・企業情報の提供」は43.1% (31人)であった。ついで「個別面談・カウンセリングの充実」は41.7% (30人)、「資格取得・専門技術取得へのサポート」は38.9% (28人)、「特にならない」は23.6% (17人)、「進学情報(他大学)の提供」は18.1% (13人)、「卒業(OB/OG)との交流の機会」が16.7% (12人)であった。

「業界・企業情報の提供」と「個別面談・カウンセリングの充実」はほぼ同じ回答率であった。個別相談を選択した学生が多いのは、予想するに外部の方の進路について何う場面はあるが、個別に相談し進路について1年次のうちから考えていきたいという思いがあるのではないかと考えた。

(豊口 みなみ)

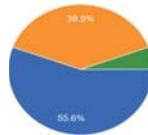


6. 学生・教職員：閉校後の校舎利用に関するアンケート： 2027年3月閉校後、本学の校舎や敷地を建物として 残して欲しいと思いますか？

【分析】

本問の回答数は72件である。「2027年3月の閉校後、本学の校舎や敷地を建物として残して欲しいと思いますか？」に対して、「はい」と答えた方は55.6% (40人)。次いで、「どちらでもない」は38.9% (28人)。「いいえ(解体・更地化などを望む)」は5.7% (4人)となった。

過半数が「校舎を残したい」と考えており、本学の建物や敷地に対する一定の愛着がうかがえる。一方で「どちらでもない」が約4割を占めている点も特徴的である。学年や在学期間、出身地域などの違いによって思い入れの程度に差がある可能性も考えられる。



- 1. はい (残して欲しい)
- 2. いいえ (解体・更地化などを望む)
- 3. どちらでもない

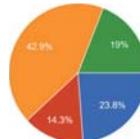
(林 楓太)

7. 学生・教職員：閉校後の校舎利用に関するアンケート： (問6で「はい」と回答した方へ) 残して欲しい理由として、 最も近いものを一つ選んでください。

【分析】

本問の回答数は43件である。閉校後に本校舎を残して欲しい理由として、「大学の『記憶』や『歴史』を後世に残したいから」が23.8% (11人)。「地のランドマークとして建物を残すべきだから」が14.3% (6人)。「何らかの形で卒業生が関われる機会を残したいから」42.9% (18人)。「その他」19% (8人)となった。

回答数において「何らかの形で卒業生が関われる機会を残したいから」が最も多いのは、それぞれ地元が違う学生が多いため、卒業生が関われる場所として拓殖短大があると集まりやすいと考える人が多いからだと考える。



- 1. 大学の「記憶」や「歴史」を後世に残したいから
- 2. 地域のランドマークとして建物を残すべきだから
- 3. 何らかの形で卒業生が関われる機会を残したいから
- 4. その他

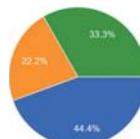
(林 楓太)

8. 学生・教職員：閉校後の校舎利用に関するアンケート： (問6で「いいえ」と回答した方へ) 残して欲しくない 理由として、最も近いものを一つ選んでください。

【分析】

本問の回答数は9件であった。2027年3月閉校後、本学の校舎や敷地を建物として残しておいて欲しくないとした人の理由で1番多かったのは「地域の発展のため、新しい施設・機能の転換を優先すべきだから」という理由が44.4%(4人)であった。ついで、「その他」が33.3%(3人)、「閉校後は区切りをつけたいから」が22.2%(2人)であった。

「地域発展のため、新しい施設・機能の転換を優先すべき」が4割を占めた。新たな施設へ生まれ変わることで、また地域から愛される場所になればと考えたのではないかと予測する。残してほしくないという理由には地域への思いがあったのではないだろうか。



- 1. 地域の発展のため、新しい施設・機能への転換を優先すべきだから
- 2. 維持管理にかかるコストを懸念するから
- 3. 閉校後は区切りをつけたいから
- 4. その他

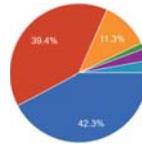
(豊口 みなみ)

9. 学生・教職員：閉校後の校舎利用に関するアンケート： 閉校後の校舎を、具体的にどのように利用して ほしいですか？（望ましいものを一つ選択）

【分析】

本問の回答数は 71 件である。「閉校後の校舎を、具体的にどのように利用して欲しいか」という質問に対して、「地域住民が利用できる公共施設」を選択した人が 42.3%(30 人)、「新たな教育・研究機関」を選択した人が 39.4%(28 人)、「地域の農業・ビジネス拠点」が 11.3%(8 人)となった。

地域に根付いた大学であるため、これからも「地域に根付いた施設になってほしい」という傾向があったのではないかと考える。



- 1. 地域住民が利用できる公共施設
- 2. 新たな教育・研究機関
- 3. 地域の農業・ビジネス拠点
- 4. 文化・芸術施設
- 5. 建物として残さず再開発
- 6. その他

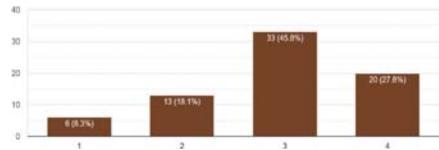
(豊口 みなみ)

10. 学生・教職員：閉校後の校舎利用に関するアンケート： 校舎が残った場合、閉校後に、もう一度この校舎・敷地 に戻ってくる機会（イベント等）があれば、参加したい とおもいますか？

【分析】

本問の回答数は 71 件である。「校舎が残った場合、閉校後にもう一度この校舎・敷地に戻ってくる機会があれば参加したいと思えますか?」という質問に対して、1「全く関心がない」が 8.5%(6 人)、2「あまり、それほど関心がない」が 18.3%(10 人)、3「出来れば、機会があれば参加したい」が 46.5%(33 人)、4「強く参加したい」が 26.8%(19 人)となった。

73.3% (52 人) と多くの人がこの拓殖大学北海道短期大学に思い入れがあるということがこのアンケートから見て取れる。また、短大という 2 年間の学校生活というものもあってか、26.8% (16 人) の人がそこまで思い入れがないことも見て取れる。

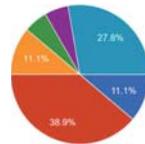


(林 楓太)

11. 教職員：閉科・閉科後のご自身の異動先について、現在の状況を 教えてください。

【分析】

本問の回答数は 18 件である。また、この設問は任意回答である。「閉科・閉校後のご自身の異動先について、現在の状況を教えてください。」について、本設問では、「現状、移動先を検討中である」が 38.9% (7 人) で最も多く、「定年退職を迎える予定」「退職を迎える予定」「その他」を合わせた回答も同じく 38.9% (7 人) となった。移動先を模索している層と、定年や退職によって一区切り



- 1. 他の学校・大学への移動が内定している
- 2. 現状、移動先を検討中である
- 3. 教育・研究職以外の道に進む予定
- 4. 定年退職を迎える予定
- 5. 退職を迎える予定
- 6. その他

を迎える層が同数である点は象徴的である。閉学は一つの制度的出来事であると同時に、教職員一人ひとりの人生の節目でもあることがうかがえる。すでに他大学等への移動が内定している、あるいは教育・研究職以外の道に進むと回答した人は合わせて 22.2% (4 人) にとどまり、多くがなお移動先を模索する過程にある現状が明らかとなった。

(林 楓太)

12. 【教職員へのインタビュー】閉校までの期間で、特に注力したいこと (研究、学生指導など)は何ですか？

【分析】

回答者は7人で、その内、「特にない」と回答したものは2人であった。回答者之内、「学生への指導、支援(進路・生活)」(5人)を注力したいという意見と、「教員は閉校に向けて地域や卒業生へのお礼、本学の教育、研究、地域貢献の功績の表明が必要だ」(1人)という意見があった。回答している人数が少ないため、この回答からの考察になるが教員としての意思を最後まで貫いていきたいという思いがあると考える。また、地域の協力のもと学生へ指導ができたため、地域や卒業生へのお礼が必要だと考えたのだと思う。

(豊口みなみ)

13. 【学生・教職員：思い出・メッセージ】本学で過ごした期間の中で、 最も心に残る「思い出」や「エピソード」を教えてください。

【分析】

回答者は71人で、多くの心に残る「思い出」や「エピソード」が寄せられた。「黎明祭」(14人)や「ミュージカル」(11人)といった拓殖大学北海道短期大学ならではの行事に関する「思い出」や「エピソード」が多く寄せられた。他にも「友達との大学生活」(11人)、「ゼミ活動」(3人)といった大学生活についても多く寄せられた。

(林 楓太)

14. 【学生・教職員：思い出・メッセージ】学生、教職員の皆さん 閉校を迎えるにあたり、「ひとこと」メッセージをお願いします。

【分析】

回答者は72人で、様々な「ひとこと」メッセージが寄せられ、すべてを紹介することはできないが、「ありがとう」(18人)や「楽しかった」(6人)、「寂しい」(6人)、「お疲れ様でした」(5人)といったようなコメントが目立った。また、入学した当初の思い(1人)や地域の教育機関が減る(3人)といったような具体的な意見もあった。

この「ひとこと」のメッセージから、拓殖大学北海道短期大学は愛された学校であったと言える。

(豊口 みなみ)

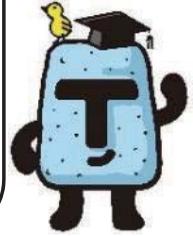
学生新聞局の調査が示したもの

本アンケートは、本学が2027年3月の閉学を控える中で実施され、学生および教職員計72名の回答を得た。学生の進路希望では就職・就農が多数を占め、堅実な進路観が示された。また、進路選択において「ワークライフバランス」や「仕事内容」を重視する傾向が強く、現代的な価値観がうかがえる結果となった。閉校が進路に影響したとする回答は約2割であり、大多数は冷静に将来を見据えている一方、進路形成の途上にある学生への丁寧な支援の必要性も示唆された。教職員については、移動先を検討中の層と定年・退職等で節目を迎える層が同数であり、閉学が制度上の決定であると同時に、個々の人生の転機でもあることが明らかとなった。

本調査の意義は、こうした状況を学生自身が主体的に問い、記録した点にある。閉学という局面を受動的に受け止めるのではなく、自らの進路や大学の役割を考察し、数値として可視化したことは、高等教育の成果の表れである。本調査は本学最終期の実態を示す記録であるとともに、学生の主体性を示す証であり、閉学を新たな出発点へとつなぐ意義深い試みであったといえるだろう。

(顧問 横関 理恵)

2025年 部活動・サークル紹介



バドミントン部

(脇田 快星、農学ビジネス学科二年)
○活動の紹介
毎週木曜日十八時〜二十一時の時間
で活動しています。

○活動のアピールポイント
週一回の活動ですが、結構、体を
動かす競技なので運動をしたという
身体的な充実感と心の満足感を味わ
うことが出来ます。

○一言
現在は二人しかいませんが意外と
楽しいです。



ログハウスプロジェクト

(岡野 花菜、農学ビジネス学科二年)
○活動の紹介
ログハウスプロジェクトです。私た
ちは大学農場で育てた野菜を売り、
地域の方々と交流をしています。

○活動のアピールポイント
四月には苗販売会、十月、十一月
には野菜販売会を行っています
野菜の他にもパウンドケーキを自
分たちで作って販売しています。パ
ウンドケーキは人気商品で毎回即売
しています。

○一言
日頃なかなか地域の方とは触れ合
うことはないので、大切な交流の場
になっています。



学生広報部「ぶれたん」

(上口 紗穂、保育学科二年)
○活動の紹介
学生広報部ぶれたんでは、学生の
目線から学校の魅力を発信していま
す。SNSを中心に、行事や授業の
様子、学生生活のリアルな一面を紹
介し、多くの人に拓大の楽しさを届
けています。

○一言：活動のアピールポイント
取材や撮影を通してさまざまな人
と関わる事ができ、コミュニケーション
力も身につきます。部員同士も仲が
良く、笑顔の絶えない明るい雰囲気
が魅力です。楽しく活動しながら、
広報スキルや発信力を伸ばせるのが
ぶれたんの大きなポイントです！



ドローンサッカー部

(山田 康介、農学ビジネス学科二年)
○活動の紹介

毎週月曜日、木曜日で活動しており、二年生九人、一年生五人で活動しています。

○活動のアピールポイント

ドローンの操作技術の向上に期待できることがこの活動の特徴です。

○一言

技術を向上させるため、日々練習をしています。



軽音楽部

(清水 春喜、農学ビジネス学科二年)
○活動紹介

今年度から活動を再開しました。特に活動はしていません。暇な時に自由に楽器を楽しく演奏しています。

○アピール

演奏を披露できる時があれば、聴きに来てください！

○一言

おいらはいくせどこまでも



野球部

(吉田 武斗、農学ビジネス学科一年)
○活動の紹介

夏はグラウンド、夏以外は体育館活動しています。

○活動のアピールポイント

元気な人がいっぱいいて、誰でも楽しく活動しています。

○一言

ぜひ、野球を一緒にしましょう。



学生自治会

(伊欲 優弥、農学ビジネス学科二年)
○活動の紹介

自治会は学生の交流やイベントの企画・運営などを通じて、みんなが安心して楽しく過ごせる場をつくることを目的とした団体です。学祭運営のサポートや自治会主催のBBQ企画、部費の管理などを通じて、学生生活の充実に貢献しました。

○活動のアピールポイント

企画力・調整力・会計管理のスキルを活かし、運営を行いました。運営と参加者の両方を満足できるように努力しました。

○一言

仲間と協力しながら、楽しく責任ある活動ができました！自治会での経験は必ず今後の人生に役立つと思います！



学生新聞局

(林 楓太、保育学科二年)

○活動紹介

今年度は学生新聞局は二名で毎週火曜日の昼休みに横関研究室で活動してきました!

新聞局の主な活動は、「拓殖大学北海道短期大学新聞」の執筆です。新聞記事は学生が主体となって作成!!自分たちで取材、執筆を行ったり、様々な方に執筆を依頼したり...多くの学生が本新聞記事に関わっています!

新聞の記事の企画、新聞局と他の



編集後記

第117号は例年と比べて、38ページと多くのページ数となりました。拓大ミュージカルがなくなり、寂しい年になると思いきや、初めての開催となった学生新聞局主催スタディツアーをはじめ、多くのイベント、各学科の関連記事が今回は盛りだくさん!!是非、全ての記事に目を通してください!

なお、毎年、松本印刷様には大変お世話になりました!学生新聞局で考えたレイアウトを丁寧にみていただき、何度も調整して、形にして下りました。お礼申し上げます。いよいよ、次号が「最終号」となります。新しい局員を募集しています!

(新聞局長 林 楓太)



学生新聞・スタディツアー参加者のみなさま



拓大・北短大交流会のみなさん(学生自治会、学生広報部、新聞局キャンパス特派員)

○一言

学生新聞は年一回の発行です。第一一七号まで発行している歴史ある学生主体の活動です。二〇二七年三月の刊行が最後となります!!新しいメンバーで新聞局の活動を楽しんでください!

キャンパス特派員

今年度は、キャンパス特派員として新聞局員以外にも多くの寄稿をいただきました。ここに名前を掲載し、心より御礼申し上げます。(敬称略・五十音順)

農学ビジネス学科二年:

伊 欲 優 弥 岡 野 花 菜
岡 部 元 太 高 木 祐 実
多 胡 水 葵 山 田 康 介

保育学科二年:

井ノ口 侑 来 飯 島 洗 希
木 村 壘 佐 藤 は るか
鈴 木 明 空 鈴 木 竜 聖

農学ビジネス学科一年:

岩 井 大 虎 岡 田 大 地
渡 部 悠 斗

農学ビジネス学科教員:

村 上 良 一
ご協力ありがとうございました。

二〇二五年度学生新聞局員

新聞局長 林 楓太 (保育学科二年)

局 員 豊 口 みなみ (農学ビジネス学科二年)

顧問 横関 理恵 (保育学科)